箱　　崎　　29

―箱崎遺跡第12次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第950集

２００７

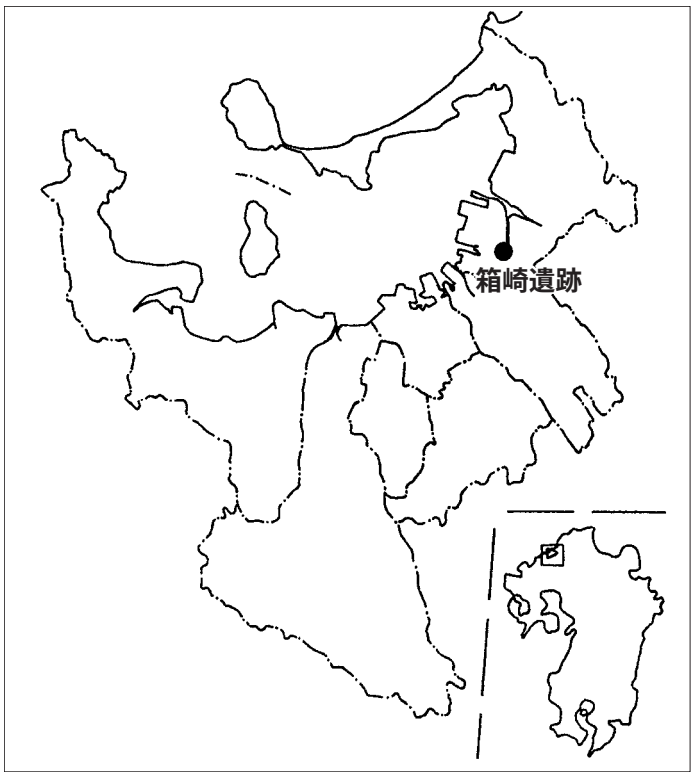
福岡市教育委員会

HAKO ZAKI

箱　崎　29

―箱崎遺跡第12次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第950集



遺跡略号　HKZ－12
調査番号　9735

２００７

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は、個人専用住宅建設に伴い調査を実施した箱崎遺跡第12次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、中世の集落跡を確認すると共に、多数の生活用具や貿易陶磁器等の交易品が出土しました。これらは、当時の箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、地権者をはじめとする多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　言

１．本書は、福岡市教育委員会が個人専用住宅の建設に伴い、福岡市東区箱崎１丁目2606-３-１において発掘調査を実施した箱崎遺跡第12次調査の報告書である。
２．発掘調査および整理･報告書作成は、国庫補助事業として実施した。
３．報告する調査の細目は下表のとおりである。
４．本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣が行った。
５．本書に掲載した遺物実測図の作成は、阿部泰之が行った。
６．本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
７．本書に掲載した挿図の製図は、阿部、榎本が行った。
８．本書で用いた方位は磁北で、真北より６°20′西偏する。
９．遺構の呼称は、井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、ピットをSPと略号化した。
10．遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
11．本書で記述する遺物の分類、説明等については、以下の文献を参考とした。

山本信夫「統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究によせて-」
『乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』 1990年

横田賢次郎･森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」
『九州歴史資料館研究論集 ４』1978年

太宰府市教育委員会 『大宰府条坊跡ⅩⅤ-陶磁器分類編-』(太宰府市の文化財第49集)2000年

12．本書に関わる記録･遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
13．本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺 跡 名	箱崎遺跡	**調 査 次 数**	12次	**遺 跡 略 号**	HKZ－12
調査番号	9735	**分布地図幅名**	箱崎34	**遺跡登録番号**	022639
開発面積	722.80m²	**調査対象面積**	234m²	**調 査 面 積**	155m²
調 査 地	福岡市東区箱崎１丁目2606-３-１				
調査期間	平成９(1997)年８月19日～９月24日				

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 6
　１．調査の概要 …… 6
　２．遺構と遺物 …… 8
　　１）井戸(SE) …… 8
　　２）土坑(SK) …… 16
　　３）溝(SD) …… 23
　　４）その他の遺物 …… 23
　３．結語 …… 24

挿図目次

第１図 箱崎遺跡位置図(１/25,000) …… 3
第２図 箱崎遺跡調査区位置図(１/5,000) …… 5
第３図 12次調査区位置図(１/1,000) …… 6
第４図 12次調査区全体図(１/100) …… 7
第５図 SE007実測図(１/40)および出土遺物実測図(１/３) …… 9
第６図 SE008実測図(１/40) …… 10
第７図 SE008出土遺物実測図(１/３) …… 11
第８図 SE009実測図(１/40) …… 12
第９図 SE009出土遺物実測図(１/２、１/３) …… 13
第10図 SE010実測図(１/40)および出土遺物実測図(１/２、１/３) …… 14
第11図 SE011実測図(１/40) …… 15
第12図 SK001･002実測図(１/40) …… 16
第13図 SK001･002出土遺物実測図(１/２、１/３) …… 17
第14図 SK003実測図(１/40)および出土遺物実測図(１)(１/３) …… 18
第15図 SK003出土遺物実測図(２)(１/３) …… 19
第16図 SK005･006･081･093実測図(１/40) …… 20
第17図 SK005･006･081･093出土遺物実測図(１/２、１/３) …… 21
第18図 SK120･129実測図(１/40)および出土遺物実測図(１/２、１/３) …… 22
第19図 SD004実測図(１/40)および出土遺物実測図(１/３) …… 23
第20図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図(１/２、１/３) …… 24

表目次

第１表 箱崎遺跡調査一覧表 …… 4

図版目次

図 版１ 12次調査区全景(南から)
図 版２ (１)SE007(西から)
(２)SE008(北西から)
(３)SE009(東から)
(４)SE010(北西から)
(５)SE010井筒(南から)
(６)SE011(北から)
図 版３ (１)SK001(西から)
(２)SK001土層(南から)
(３)SK002土層(東から)
(４)SK003(北から)
(５)SK005(東から)
(６)SK006(北から)
図 版４ 出土遺物

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

平成９(1997)年８月４日付けで、浦上紀之氏より福岡市教育委員会宛てに福岡市東区箱崎１丁目2606-３-１(面積：722.80㎡)における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号：９－２－209)。

これを受けて教育委員会埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていることから８月５日に試掘調査を実施し、申請地内で土坑やピット等の遺構を確認した。その後、この試掘調査成果をもとに両者で協議を行なった結果、申請地のうち、建物建設工事部分については、地下遺構の破壊が回避できないことから、同部分を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。なお、建設予定面積は約310㎡であるが、このうち、西側部分については、試掘調査の結果、既存建物による撹乱が著しいことから要調査範囲から除外したため、調査対象面積は234㎡である。

発掘調査は、個人専用住宅建設に伴うものであることから国庫補助事業とし、同月19日から着手することとなった。

なお、整理･報告書作成も国庫補助事業とし、平成18(2006)年度に実施した。

２．調査の組織

調査委託：浦上紀之
調査主体：福岡市教育委員会 文化財部 埋蔵文化財課(現 埋蔵文化財第１課)
調査総括：埋蔵文化財課長 荒巻輝勝(調査)　埋蔵文化財第１課長 山口譲治(整理)
同課第２係長 山口譲治(調査)　同課調査係長 山崎龍雄(整理)
調査庶務：同課第１係 河野淳美(調査)　文化財管理課管理係 鈴木由喜 (整理)
事前審査：同課主任文化財主事 松村道博(試掘)
同課第２係 屋山洋(試掘)
調査担当：同課第２係 榎本義嗣(現 埋蔵文化財第１課調査係)
調査作業：金子國雄　熊本義徳　坂田武　渋谷博之　石橋テル子　金子澄子　唐島栄子 酒井康恵
杉村百合子　辻美佐江　永松伊都子　永松トミ子　日尾野典子
整理作業：西島信枝 松尾真澄

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで浦上紀之氏をはじめとする関係者の皆様方には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

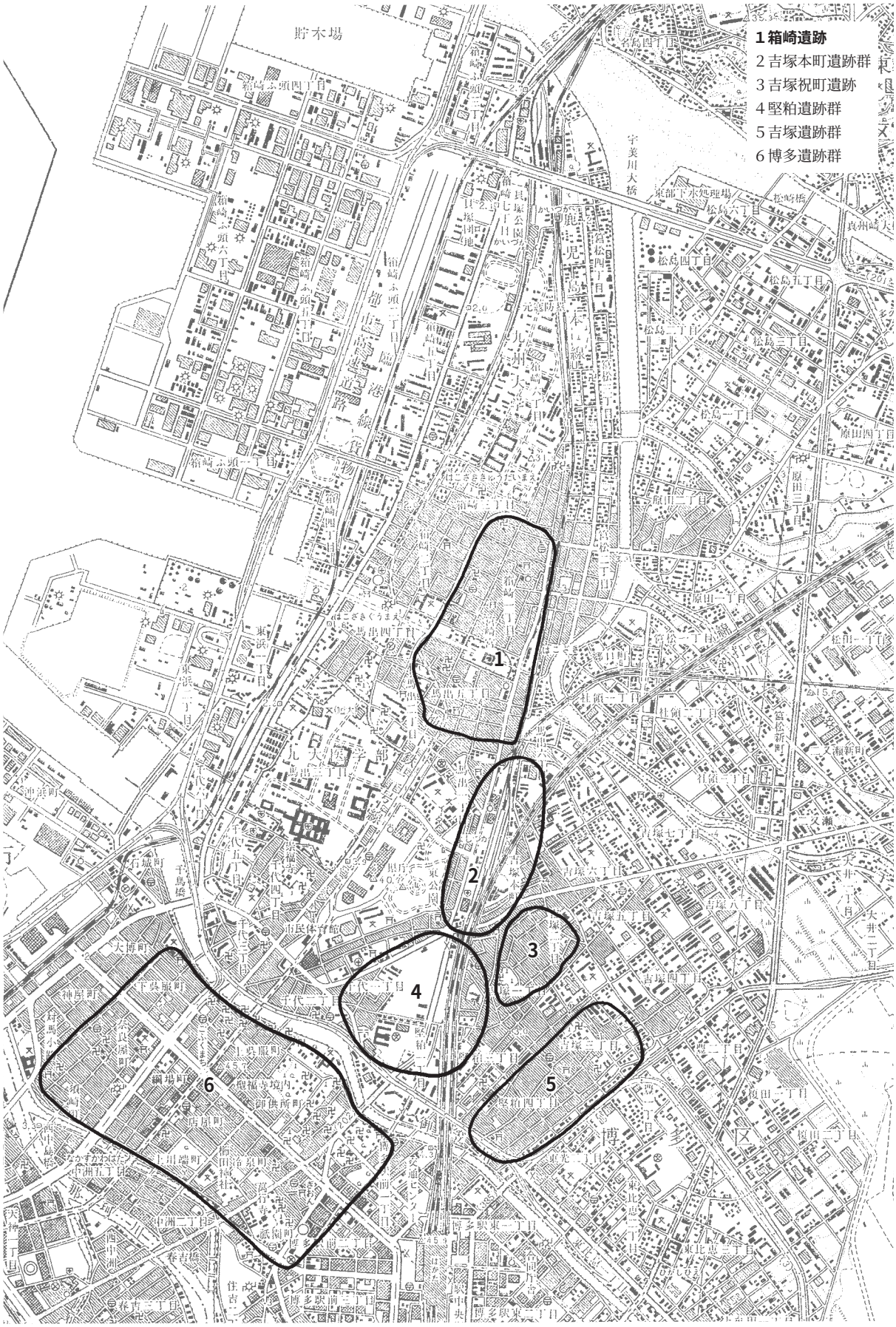
Ⅱ．遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地している。この砂丘は東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至っており、形成時期については遅くとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。これらの砂丘は鞍部や旧河道により画されるものと考えられ、それぞれの微高地上には、第１図に示した範囲で、北側から箱崎遺跡、吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、博多遺跡群が知られている。本遺跡はこの砂丘の北端部に位置し、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に画される。この東側にはかつて入り江が博多湾から湾入しており、中世には「箱崎津」と呼ばれた港として機能していた。

第２図は現在までの本調査および試掘調査で確認された砂丘面の標高を基に旧地形の等高線を推定した図を現況図に重ねたものである。遺跡北東端部で実施された第10次調査は東西方向に尾根線を分断しており、調査区のほぼ中央に標高2.8mの緩いピークが認められる。この尾根は第６次・53次調査区付近から南西方向に延び、第７次調査区付近からやや東側に振れて、筥崎宮境内、第２次調査区付近までほぼ南北方向に延伸する。砂丘尾根は遺跡南半部では東側に大きく振れるため、砂丘の西側には広い緩斜面が形成される。また、遺跡南東部の第26次調査８区から遺跡南西部の第27次調査区付近には東西方向の浅い谷が貫入し、砂丘鞍部を形成していたものと推定される。該地付近には昭和初期まで水路が遺存していたことからも、従来低地であったと考えられる。また、その鞍部を挟んだ南東側の第22次調査４区および第26次調査６区付近には標高約3.5mを測る等高線が認められ、更に南側に延伸するものと考えられるが、その東側は後述する様に河川による侵食が進み、砂丘東側の斜面は殆ど認められない。なお、現在のところ砂丘南西端部の微地形は調査例が少なく不明瞭である。

同図中の網線は試掘調査等における遺跡の有無によって遺跡範囲を推定したもので、西側は標高２ｍの等高線がその西限をほぼ示している。東端部では遺跡東側を北流する宇美川によって砂丘端が開析され、崖面を形成するものと推定され、更にその東側では水性の顕著な堆積物が確認されている。第10次・41次調査東端部や第30次調査15区では砂丘端部が検出されており、北東端部をおさえることができる。また、第８次調査の北側では試掘調査によって、時期不詳ながら杭列も確認されている。東限については、筥崎土地区画整理事に伴う調査によりJR鹿児島本線に沿うラインが該当する。遺跡の南端は、先述した様に南東側では鞍部を挟み、更に遺跡範囲が南に拡大する可能性が高く、第40次調査19区や第49次調査においても古墳時代以降の遺構が検出されている。また、北側では第36次調査において密度の濃い遺構群が確認されており、北側についても従来推定されていた遺跡範囲が拡大することが明らかになってきた。該地におけるより詳細な旧地形の解明および遺跡範囲の確定は今後の調査課題の一つといえよう。

本遺跡の発展の契機となった歴史的事象としては筥崎宮の創建をまず挙げることができる。同宮は延長元年(923)に穂波郡大分宮を遷座、創建したと伝えられる。永承６年(1051)には石清水八幡宮の別宮となるが、保延６年(1140)には一時大宰府の府領となった。しかし、文治元年(1185)には再び石清水八幡宮からの補任がなされた。この間、仁平元年(1151)には大宰府検非違所の官人らが博多とともに箱崎の宋人大追捕を行っている。これを記した『宮寺縁事抄』には両地区に宋人が在住していたことや1,600軒以上の家屋が存在したことが記述されており、日宋貿易に関与した宋商人の家屋を含む町が既に該地に形成されていたことを裏付ける。文永11年(1274)の元寇(文永の役)の際には筥崎宮が焼失したことが伝えられており、同地区一帯も被災した可能性が高い。なお、元の再度の襲来に備え、建治２年(1276)、箱崎地区の海岸線に薩摩国の分担によって元寇防塁が築かれる。至治３年(1323)に沈没



第１図　箱崎遺跡位置図(１/25,000)

したことが判明している韓国新安沖の沈没船からは「筥崎宮」銘の木簡が出土しており、同宮は該期においても引き続き日本の大陸交易拠点の一つとして位置付けられる。以後の中世後半期においても『海東諸国紀』や『筑紫道記』、『宗湛日記』等に箱崎の地名が散見され、海上交通の要所や箱崎松原に代表される名勝地としてもその名を残している。

箱崎遺跡では現在までに55次の調査が実施されている（第１表・第2図）。これまでに最も古く位置付けられる遺物としては第６次調査出土の磨製石斧や第20次調査出土の刻目突帯文土器の甕片があるが、後世の遺構からの出土である。また、同様に中世遺構に混入し、弥生時代中期の土器片も散見されるが、現在のところ最も時期の遡る遺構としては古墳時代初頭のもので、第８次・20次・22次・26次・30次・40次調査等において竪穴住居や周溝墓をはじめとする遺構が検出されている。これらは前期を主体とするが、中期、後期の遺構・遺物も散見される。なお、第40次調査では砂丘上に築造された５世紀代の葺石を有する円墳が確認されている。これらはいずれも砂丘尾根から陸側の東側緩斜面上に立地する調査区からの検出であり、比較的安定した自然環境を選択したことが看取される。その後、数世紀の断絶が認められるが、筥崎宮創建時の10世紀代の遺構は同宮の南東側に近接する第２次・22次・26次・30次・40次・54次調査区において確認されている。先に述べた砂丘鞍部の在り方等を勘案すると、その具体的な位置は不詳であるが、前述した港湾施設がこれら調査区の東側に存在する可能性が示唆される。11世紀代では前代のやや拡大した範囲において該期の遺構が確認され、これらは尾根線および東側緩斜面上に立地する。井戸等の生活遺構が密度をもって存在することから中世集落形成の端緒として指摘される。12世紀中頃からは海側の西側緩斜面の利用も開始され始め、12世紀後半には遺跡の広範囲に集落が展開する。13世紀以降もほぼ全域に集落が確認されているが、西側斜面を積極的に生活の場として活用している。また同斜面上の北側を主として、第５次・11次・21次・24次・29次・31次・32次・34次・35次・38次・44次・51次で確認されている13世紀後半代の焼土層は、文永の役に起因する可能性が高く、筥崎宮と併せ一帯の市街地が被災したことが推測される。また、中世後半期においても各所で遺構が確認されているが、前半期に比してやや少数である。第13次調査では短冊形の地割を示す遺構分布が看取され、当時の町屋構造を示す好例である。

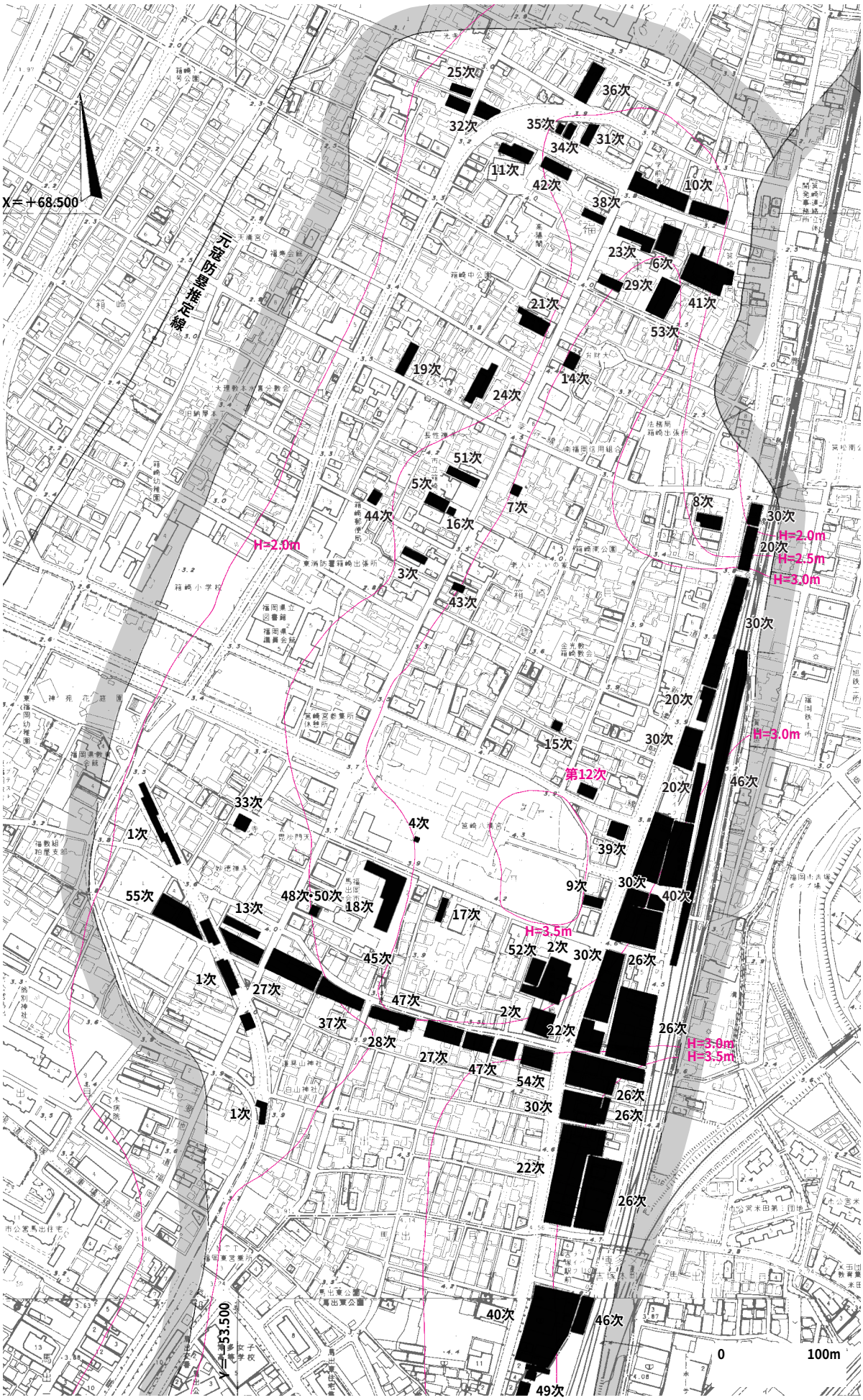
＜引用・参考文献＞

・小林 茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会 1998年
・川添 昭二編『よみがえる中世１ 東アジアの国際都市 博多』平凡社 1988年
・榎本 義嗣「福岡市所在の箱崎遺跡について」『中世都市研究会2003年九州大会資料集』2003年

調査次数	調査年度	主な遺構の時期	報　　文
第１次	1983	12世紀後半～15世紀	『高速鉄道関係Ⅶ』市報第193集(1988)
第２次	1986	10世紀後半～15世紀	『箱崎遺跡』埋報第79集(1987)
第３次	1989	12世紀中頃～15世紀	『箱崎遺跡２』市報第262集(1991)
第４次	1989	11世紀	市年報Vol. 4(1991)
第５次	1991	12世紀～15世紀	『箱崎３』市報第273集(1992)
第６次	1994	12世紀後半～13世紀	『箱崎遺跡４』市報第459集(1996)
第７次	1994	12世紀～13世紀	『箱崎遺跡４』市報第459集(1996)
第８次	1996	古墳時代、12世紀中頃～13世紀	『箱崎７』市報第591集(1999)
第９次	1996	11世紀～13世紀	『箱崎遺跡５』市報第550集(1998)
第10次	1996	12世紀前半～13世紀	『箱崎６』市報第551集(1998)
第11次	1997	12世紀後半～13世紀	『箱崎８』市報第592集(1999)
第12次	**1997**	**12世紀～13世紀**	**『箱崎29』市報第950集(2007)：本報告**
第13次	1997	15世紀	『箱崎８』市報第592集(1999)
第14次	1998	12世紀後半～14世紀前半	『箱崎９』市報第625集(2000)
第15次	1998	11世紀後半～12世紀	『箱崎16』市報第810集(2004)
第16次	1998	12世紀～15世紀	『箱崎11』市報第703集(2002)
第17次	1998	12世紀中頃～16世紀	『箱崎12』市報第704集(2002)
第18次	1999	12世紀中頃～16世紀	『箱崎10』市報第661集(2001)
第19次	1999	12世紀後半～14世紀	『箱崎10』市報第661集(2001)
第20次	1999	古墳時代、12世紀前半～13世紀	『箱崎14』市報第767集(2003)
第21次	2000	12世紀中頃～14世紀	『箱崎13』市報第705集(2002)
第22次	2000	古墳時代、10世紀～15世紀	『箱崎17』市報第811集(2004)：４区 『箱崎22』市報第852集(2005)：５区
第23次	2000	12世紀、13世紀後半～14世紀	『箱崎12』市報第704集(2002)
第24次	2000	12世紀後半～14世紀	『箱崎15』市報第768集(2003)
第25次	2001	13世紀～近世	『箱崎25』市報第896集(2006)
第26次	2001	古墳時代、10世紀～15世紀	『箱崎21』市報第815集(2004)：６・９・10区 『箱崎23』市報第853集(2005)：７・８区
第27次	2001	11世紀後半～15世紀	『箱崎18』市報第812集(2004)
第28次	2001	14世紀～近世	市年報Vol. 16(2003)

調査次数	調査年度	主な遺構の時期	報　　文
第29次	2002	12世紀後半～15世紀	『箱崎19』市報第813集(2004)
第30次	2002	古墳時代、10世紀～15世紀	『箱崎26』市報第914集(2006)：15・16区 『箱崎27』市報第948集(2007)：11～14、17区
第31次	2002	12世紀後半～13世紀	『箱崎19』市報第813集(2004)
第32次	2002	13世紀後半～14世紀前半、近世	『箱崎25』市報第896集(2006)
第33次	2002	12世紀後半～14世紀	市年報Vol. 17(2004)
第34次	2002	12世紀後半～14世紀	市年報Vol. 17(2004)
第35次	2002	12世紀後半～14世紀	市年報Vol. 17(2004)
第36次	2002	14世紀～15世紀	市年報Vol. 17(2004)
第37次	2002	12世紀後半～14世紀	『箱崎30』市報第951集(2007)
第38次	2002	13世紀後半～14世紀	『箱崎20』市報第814集(2004)
第39次	2002	11～12世紀	『箱崎24』市報第854集(2005)
第40次	2003	古墳時代、10～15世紀	『箱崎27』市報第948集(2007)：18区 『箱崎28』市報第949集(2007)：19区
第41次	2003	12世紀後半～13世紀	『箱崎24』市報第854集(2005)
第42次	2003	12世紀～14世紀	『箱崎25』市報第896集(2006)
第43次	2003	11～12世紀	市年報Vol. 18(2005)
第44次	2003	12世紀後半～14世紀	『箱崎24』市報第854集(2005)
第45次	2003	12～13世紀	『箱崎30』市報第951集(2007)
第46次	2004	古墳時代、10世紀～15世紀	『箱崎27』市報第948集(2007)：20区 『箱崎28』市報第949集(2007)：21区
第47次	2004	11～15世紀	市年報Vol. 19(2006)
第48次	2004	近世	市年報Vol. 19(2006)
第49次	2005	古墳時代、11～13世紀	『箱崎28』市報第949集(2007)
第50次	2005	14～15世紀、近世	整理中
第51次	2005	12世紀～14世紀	『箱崎31』市報第952集(2007)
第52次	2006	11～15世紀	整理中
第53次	2006	12～13世紀前半、16世紀以降	整理中
第54次	2006	10世紀～13世紀	整理中
第55次	2006	調査中	

第１表　箱崎遺跡調査一覧表



第２図　箱崎遺跡調査区位置図(１/5,000)

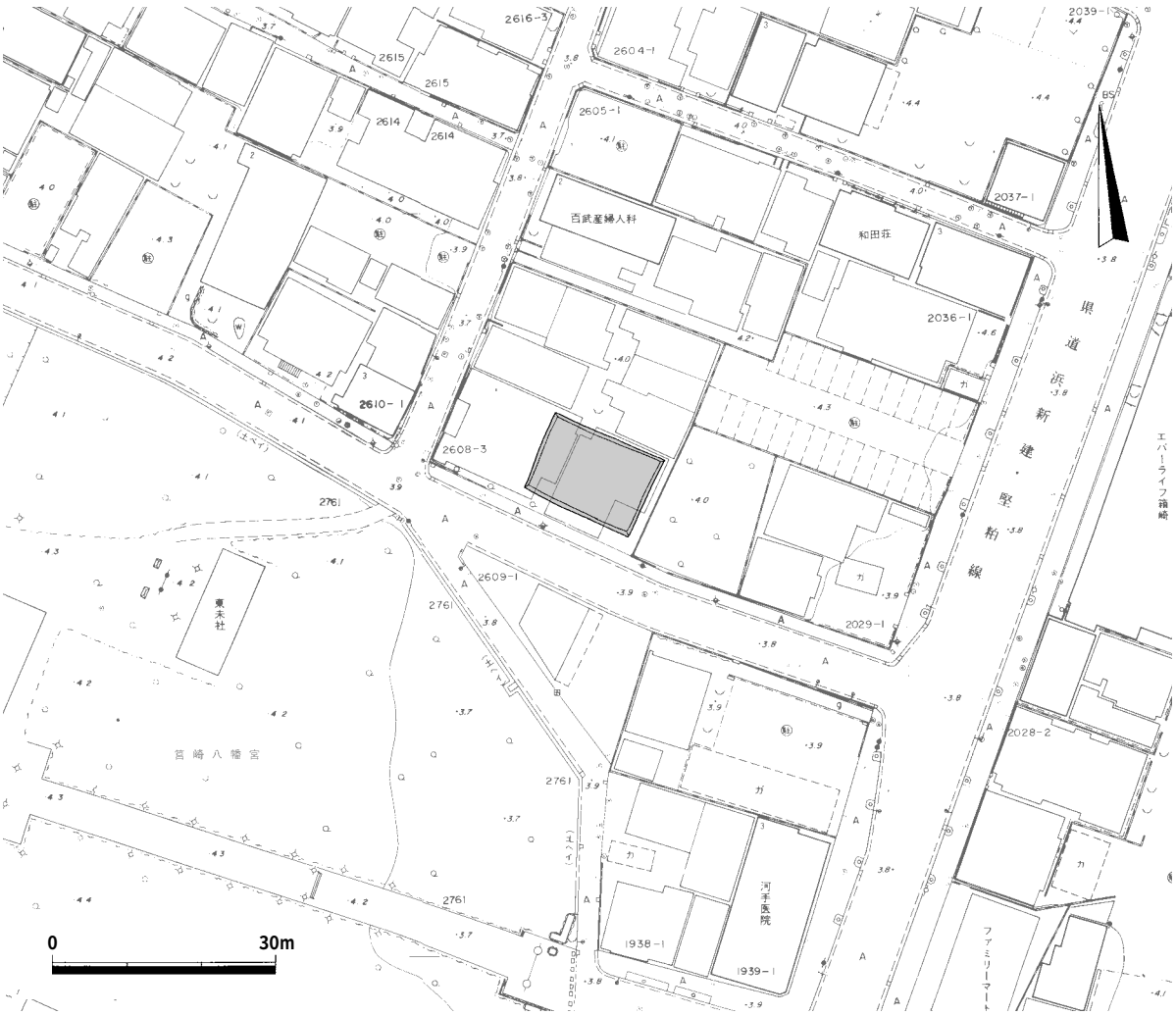
Ⅲ．調査の記録

１．調査の概要

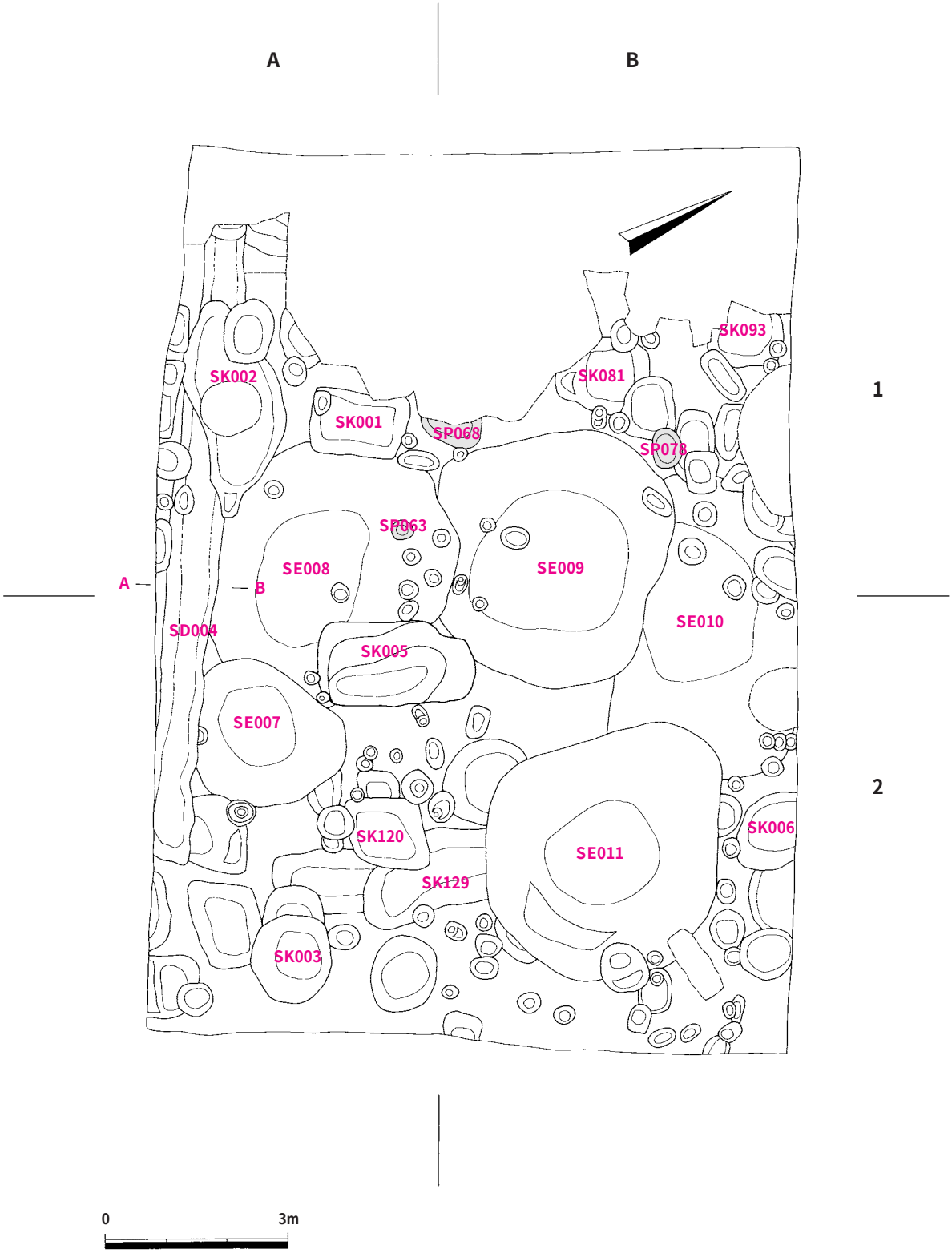
今回報告する第12次調査区は、東区箱崎１丁目2606-３-１に所在し、箱崎遺跡の立地する古砂丘南東部の尾根線上に位置する。調査前の状況は、既存建物解体後の平地で、その標高は約3.7mであった。なお、本調査区の近接地では、北西側の尾根線上で第15次調査(調査番号：9816)、南側の道路を隔てた南東側の砂丘東側緩斜面では、第39次調査(調査番号：0302)が実施されている。また、南西側には筥崎宮が鎮座する。

今回遺構検出を行った砂丘基盤層である黄褐色砂層は、表土および近現代の客土直下に認められ、その標高は3.2～3.3m前後を測る。検出した主な遺構は、中世前半の井戸、土坑、溝、ピット等であるが、「Ⅰ.－１.調査に至る経緯」で触れたように、調査区西側では既存建物による撹乱が著しい。

発掘調査は、平成９(1997)年８月19日、重機による表土剥ぎ取りから着手した。翌日に重機による作業と並行しながら、発掘器材を搬入し、外柵設置や調査区周辺養生を行なった。21日より壁面清掃や遺構検出等の人力作業を開始し、その後、検出遺構の掘り下げや、遺物の取り上げ、写真撮影、図化等の作業を進めた。全体作業が終了した９月18日に高所作業車による全体写真撮影、22日に重機による埋め戻しを行い、24日の器材撤収をもって12次調査を完了した。なお、調査対象面積は、「Ⅰ.－



第３図 12次調査区位置図(１/1,000)



第４ 図 12次調査区全体図(１/100)

１.調査に至る経緯」のとおり、申請面積722.80㎡のうち234㎡であったが、周囲の安全対策上、実際の調査面積は155㎡であった。調査時の遺構番号は、001から３桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。また、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における平面座標を基準とした10m単位での英字(南側をA、北側をB)と数字(西側を１、東側を２)を組み合わせたグリッド表記を用いる(第４図参照)。

２．遺構と遺物

１)井戸(SE)

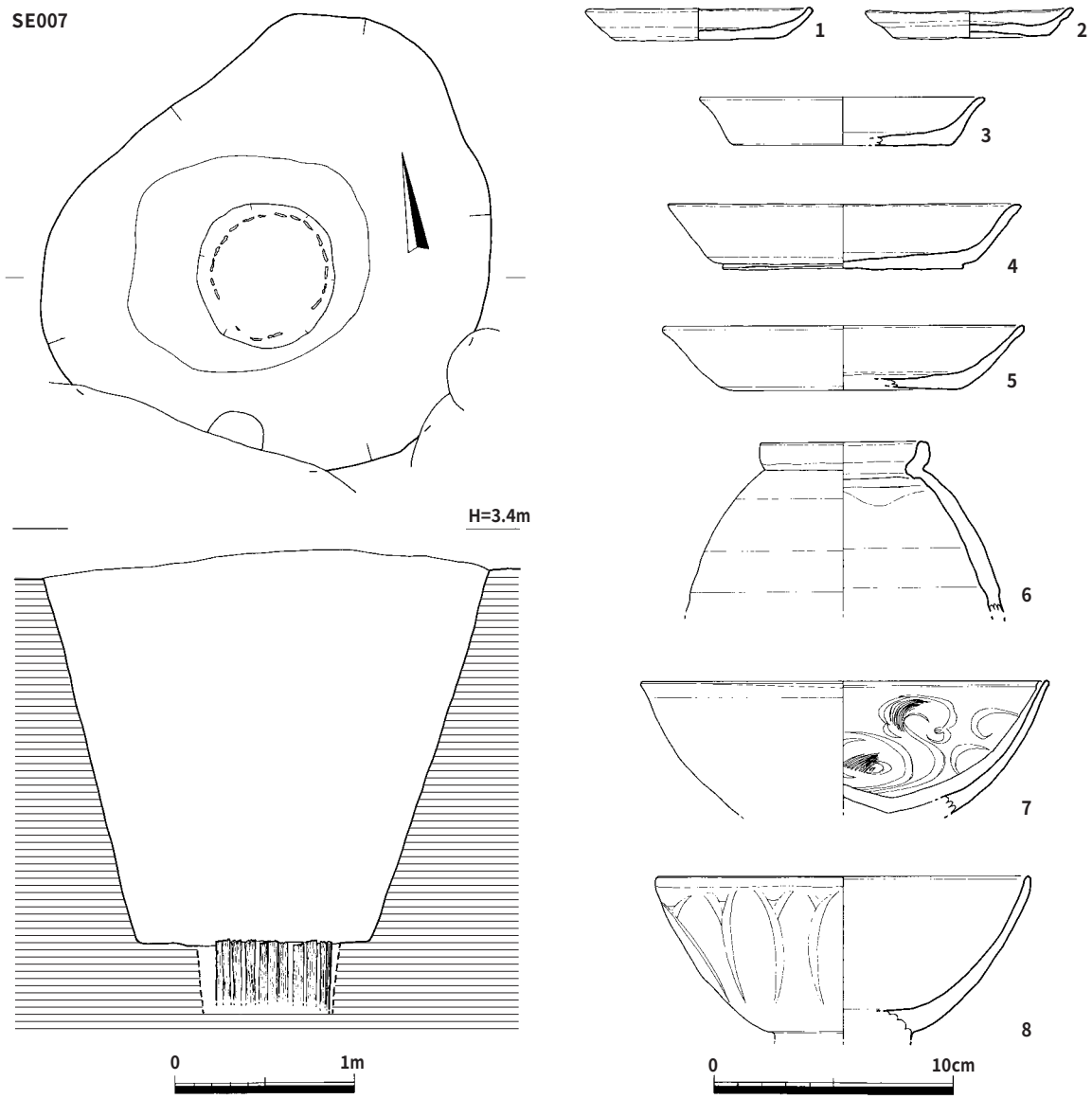
計５基の井戸を検出した。１基を除いて井筒下部には木桶を用いた水溜が遺存する。また、いずれも標高約１m前後で湧水するため、底面が明確に確認できていない。

SE007(第５図) Ａ－２区で検出した井戸で、SD004に切られ、SE008を切る。径2.5m前後の不整な円形プランを呈する。覆土は、暗黄褐色砂と褐色砂の互層であるが、中央の井筒部分は灰褐色弱粘性砂質土を主体とする。上面からの深さ約2.2mに狭い平坦面を設け、更に井筒下部を据えるため、径0.8mの円形の掘り込みを有する。その内部は湧水するが、径60～70cmを測る木桶の板材約20枚が遺存していた。材の保存状態は不良であるが、幅８cm前後、厚さ１～1.5cm、長さ30cm以上を測る。

出土遺物(第５図) １・２は土師器小皿で、順に口径は9.2、8.5cmを測る。１は回転ヘラ切り底で、板状圧痕を有する。２の外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。４～６は土師器坏である。３は復元口径11.6cmを測る小形の坏で、外底部は板状圧痕のない回転糸切りである。４は回転糸切り底で、復元口径14.5cmを測る。板状圧痕が認められる。５の復元口径は14.8cmである。外器面は風化し、調整不明である。６は中国陶器の壺で、短い口縁部を有する。暗灰色の胎土に茶褐色の釉が薄く掛けられる。７・８は龍泉窯系青磁である。７は碗Ⅰ－３a類で、内面に片彫りおよび櫛状工具による花文を配する。オリーブ色の釉を内外面に施す。８は碗Ⅱ－ａ類である。外面に鎬のない蓮弁文を片彫りにより描く。胎土は淡黄灰色で、釉は黄味をおびた緑色を呈する。貫入が多く認められる。他に瓦器、須恵質土器、白磁碗Ⅴ類等の細片が出土している。以上の出土遺物や重複関係から13世紀中頃の遺構と考えられる。

SE008(第６図) Ａ－１・２区に位置し、SE009を切る。また、SE007、SK001・002・005、SP063に切られるため、平面プランは不明確であるが、径約４～4.4mの楕円形を呈するものと推定される。覆土は、暗黄褐色砂と褐色砂の互層で、井筒部分は灰褐色砂質土を主体とする。上面からの深さ約2.1mに広い平坦面を設け、その東側に井筒下部を据えるための径0.8～0.9mを測る円形の掘り込みを有する。その内部は湧水し、底面の確認ができなかったが、水溜として置かれた木桶が確認できた。復元径50～60cmを測る桶は土圧により歪みが生じ、遺存状態は不良であった。

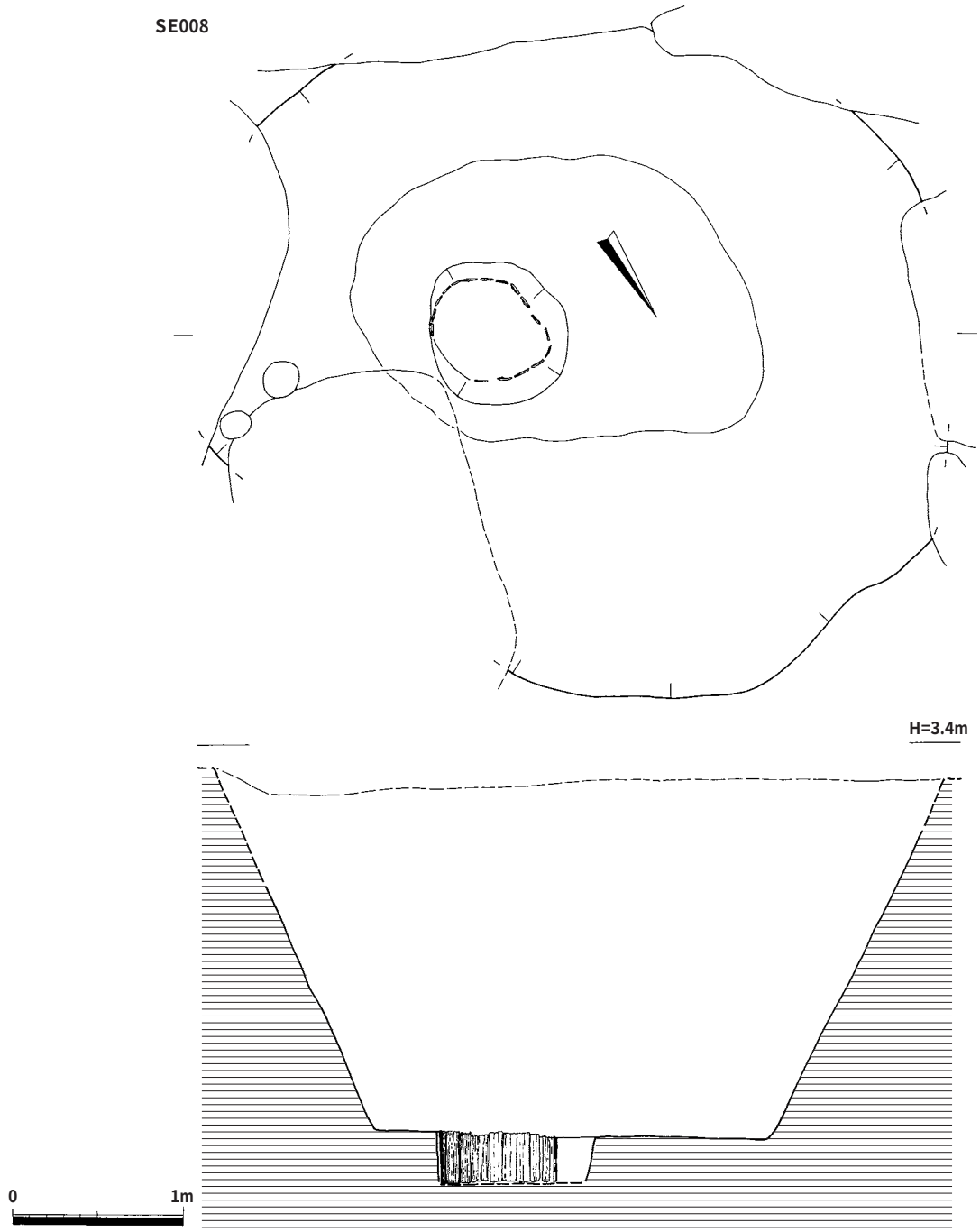
出土遺物(第７図) ９・10は回転糸切り底の土師器小皿で、順に復元口径は8.8、9.6cmを測る。９には板状圧痕がある。11は復元口径10.8cmの瓦器皿である。器面をヘラ研磨により丁寧に仕上げる。回転糸切り底の外底部には板状圧痕が認められる。12～14は土師器坏で、いずれも板状圧痕を有する回転糸切り底である。順に復元口径は12.9、14.0、14.6cmである。15は中国陶器の壺もしくは水注であろう。胎土は赤味のある茶褐色を呈し、外底部および外面下端部を除き、光沢のある暗茶褐色の釉が施される。外面は回転ヘラ削りを行い、高台風の底部を作り出す。16～20は龍泉窯系青磁で、16～18は碗、19・20は皿である。16は碗Ⅰ－２類で、見込みおよび内面に片彫りによる花文を有する。外面の釉の一部が畳付きおよび外底部までおよぶ。17は碗Ⅰ－１類で、内外面および見込みに施文しない。



第５図 SE007実測図(１/40)および出土遺物実測図(１/３)

釉調は淡く、畳付きまで施釉される。18は碗Ⅱ－ｂ類で、幅広の片彫りによる鎬蓮弁文を外面に施す。釉はやや発色が鈍く、露胎の外底部は淡赤茶褐色を呈する。19は皿Ⅰ－１ｃ類で、見込みには片彫りと櫛状工具による施文を有する。底部は厚味があり、外底部は露胎となる。20は見込みに櫛状工具による花文を有する皿Ⅰ－２ｂ類である。外底部の釉は19同様に削り取る。21は同安窯系青磁碗Ⅰ－１ｂ類で、外面には細かい櫛目、内面には片彫りおよび櫛状工具による文様を有する。内面上位には沈線を施し、鈍く屈曲する。見込みは小振りで、明瞭な段が認められる。22は温石と推測される滑石製品である。器面が緩くカーブし、石鍋等の胴部を再加工したものと考えられる。長さ9.2cm、幅7.2cm、厚さ2.0cmを測り、上部に径1.3cmの穿孔を有する。他に白磁碗Ⅳ・Ⅷ類や縄目叩き瓦等の細片が出土している。以上から13世紀前半から中頃の井戸と考えられる。

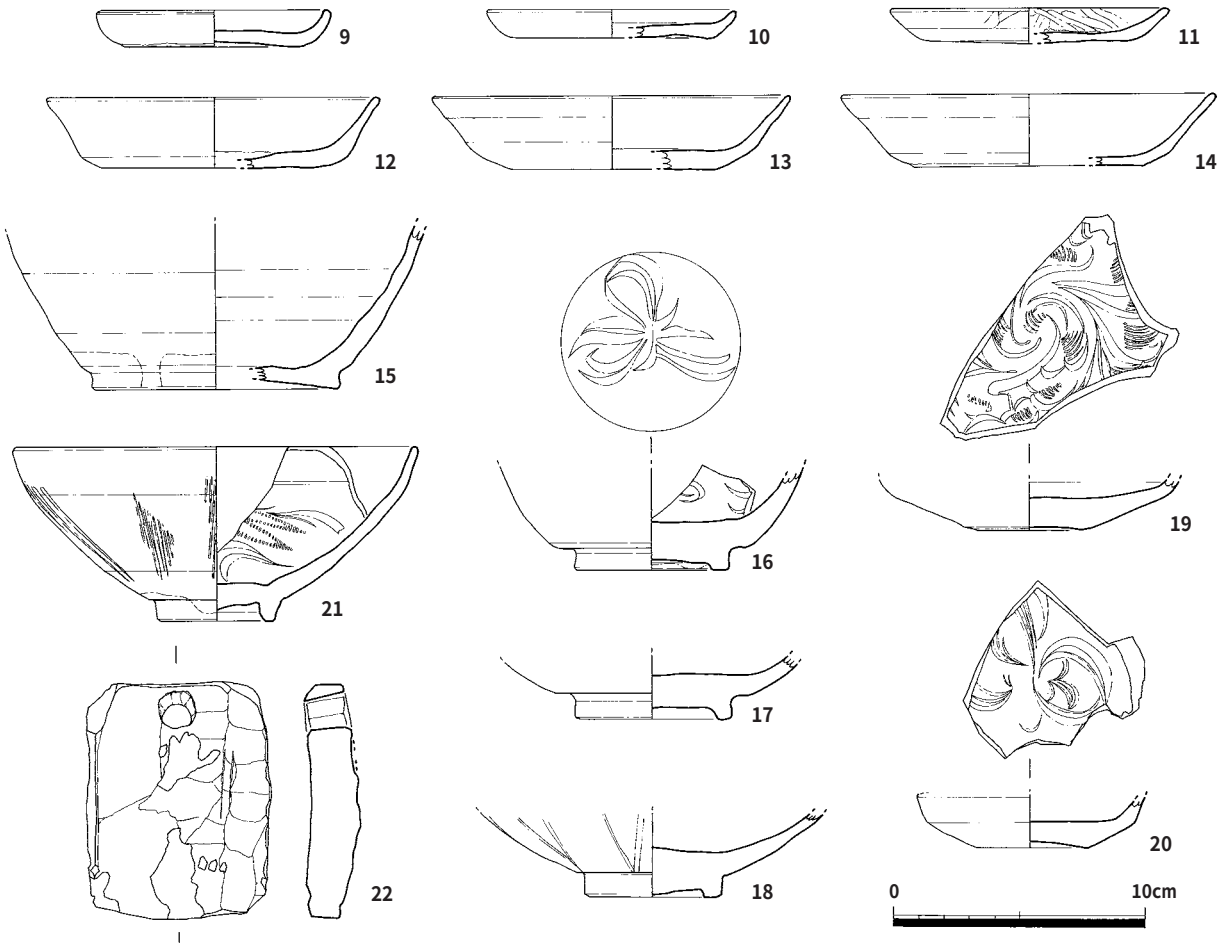
SE009(第８図) Ａ・Ｂ－１・２区で検出した井戸で、SE008、SK005に切られ、SE010を切る。平面プランは不整な円形状を呈し、径4.2～4.4mを測る。覆土は、暗黄褐色砂と褐色砂の互層で、上面か



第６図 SE008実測図（１/40）

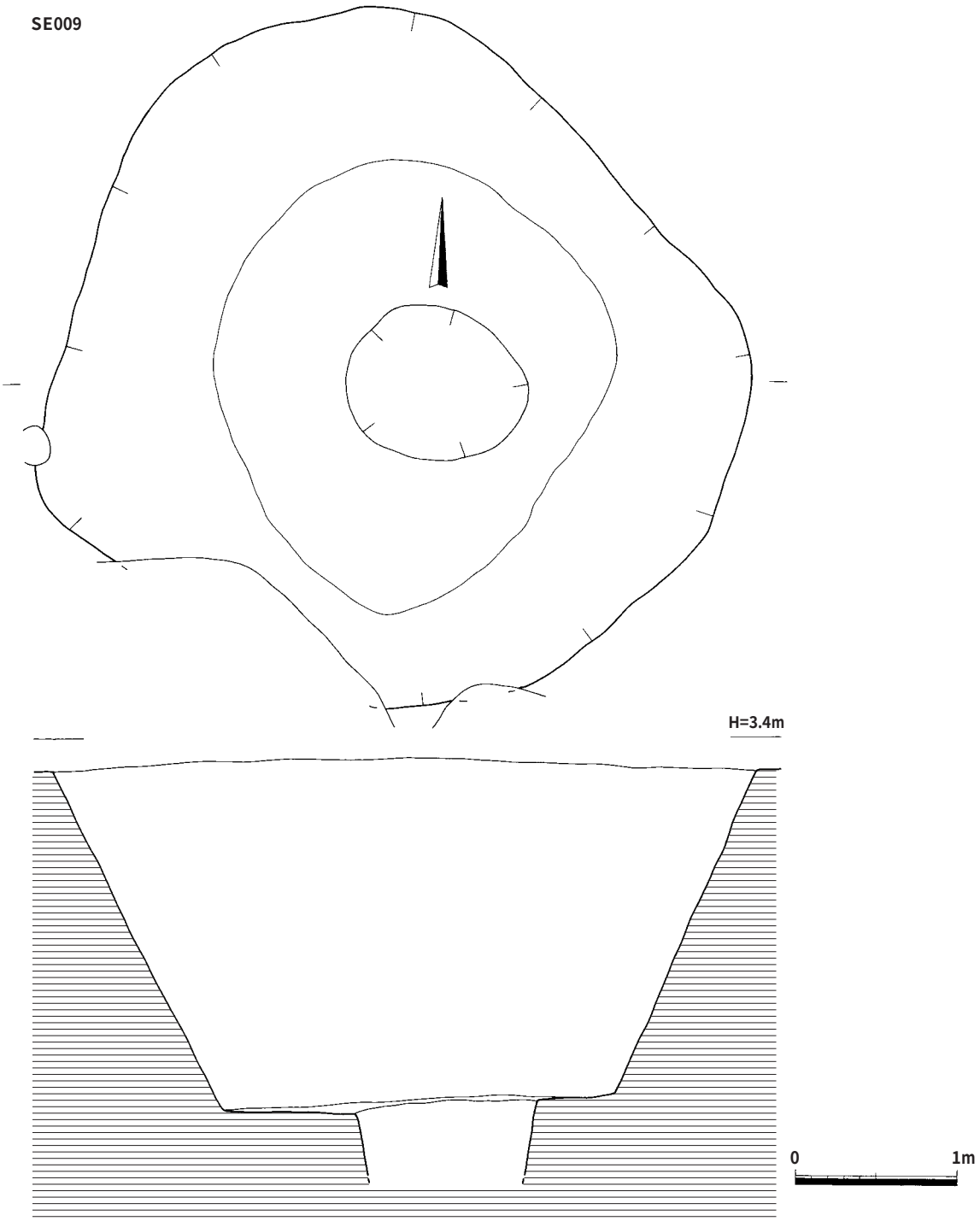
ら約１ｍを掘り下げた段階で井筒が腐食したと考えられる暗灰色砂質粘性土が中央部に確認できた。また、上面からの深さ約2.2mに平坦面を設け、そのほぼ中央に井筒下部を据えるための径0.9～1.1mを測る円形の掘り込みが認められたが、他の井戸に見られた木桶は確認できず、木質等も出土していない。また、内部は湧水が著しく、底面の確認ができなかった。

出土遺物（第９図） 23～31は回転糸切り底の土師器小皿で、口径は8.0～9.4cmを測り、平均は9.0cmである。23～26を除いて外底部に板状圧痕を有する。32～38は土師器坏である。いずれも回転糸切り



第７図 SE008出土遺物実測図（１/３）

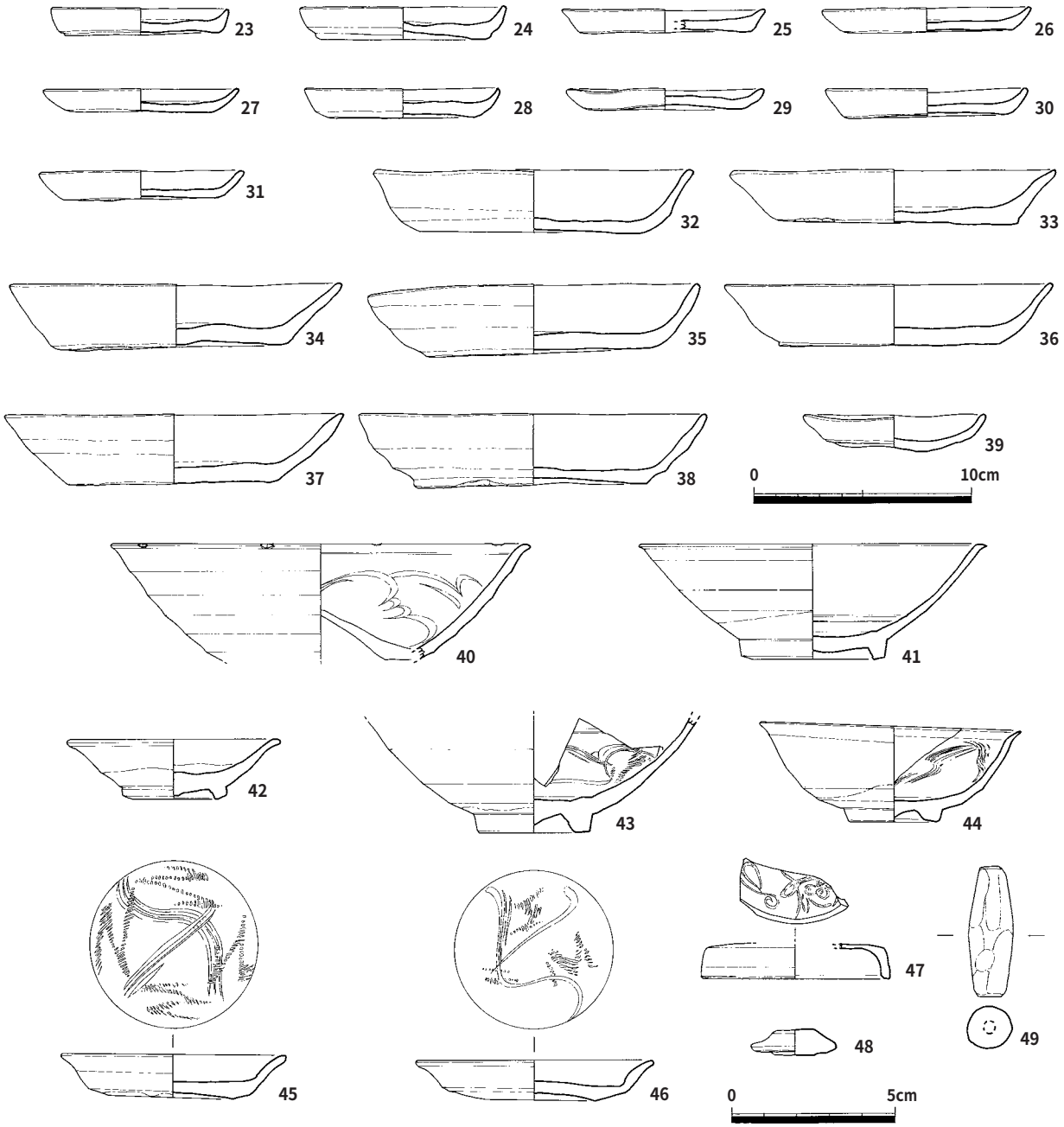
底で、36･37には板状圧痕がない。口径は14.5～15.7cmで、平均は15.0cmを測る。32･34は井筒の上層部から出土したほぼ完形品である。39は瓦器皿で、ヨコナデ調整を施す。外底部は回転ヘラ切り後、粗くナデを加える。焼け歪みが著しい。40～42は白磁である。40は輪花を有する碗Ⅶ－ｂ類で、口縁端部は僅かに外反する。体部内面に片彫りおよび櫛目描きによる花文を施し、口縁部下には細い沈線が巡る。釉色はやや緑味を帯び、外面には貫入が多く認められる。41は碗Ⅷ－１類である。口縁端部は短く屈折し、上面は水平である。見込みの釉を輪状に掻き取り、外面下半は露胎である。42は皿Ⅲ－１類で、41同様に見込みの釉を削り取っている。やや肉厚で、口縁部は緩く外反する。43～46は同安窯系青磁である。43は碗Ⅰ－１a類である。内面には片彫りおよび櫛状工具による施文を有し、見込みには沈線が巡る。透明な釉は光沢があり、外底部は露胎となる。44は小碗Ⅰ類である。丸味のある体部に外反する口縁部が付く。見込みは広く、浅い沈線を施す。体部内面には櫛目による施文を有する。体部下半は露胎である。釉調はややくすんだ淡緑色を呈する。45･46は皿Ⅰ類で、見込みに片彫りおよび櫛状工具による文様を有する。体部下半で屈曲し、口縁部は外反する。また、内面に貫入が多い。45は外面下半以下が露胎となるⅠ－１ｂ類、46は外底部の釉を掻き取るⅠ－２ｂ類である。47･48は青白磁である。47は合子蓋で、天井部に型押しによる花文を施す。胎土は緻密な白色を呈し、外面および内面天井部に施釉される。48は径2.6cmを測る小形の落とし蓋である。内面は露胎となり、回転糸切り痕が残る。49は紡錘形の管状土錘で、長さ4.0cm、径1.3cmを測る。指ナデ調整を施す。他に



第８図 SE009実測図（１/40）

須恵質土器、中国陶器、縄目叩き平瓦、滑石製石鍋等の細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀後半代の遺構に位置付けられる。

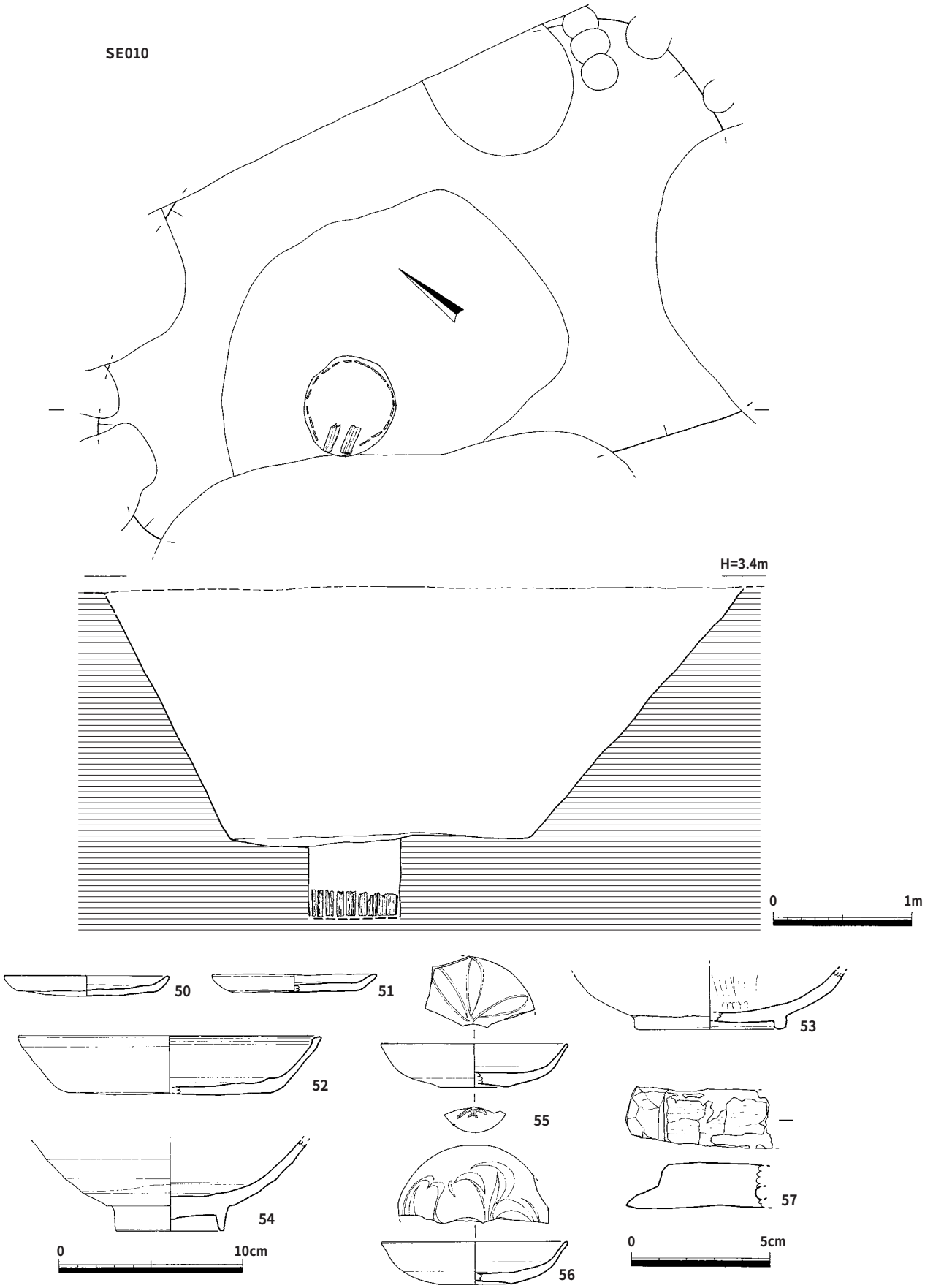
SE010（第10図） Ｂ－１・２区で確認した。南側をSE009・011に切られ、北側が調査区外に延びるため、平面プランが明瞭でないが、現況からは楕円形を呈するものと考えられ、長径約５m、短径３m以上を測る。覆土は、暗黄褐色砂と褐色砂質土の互層で、上面からの深さ約1.5mで井筒が腐食したと



第９図 SE009出土遺物実測図（48･49は１/２、他は１/３）

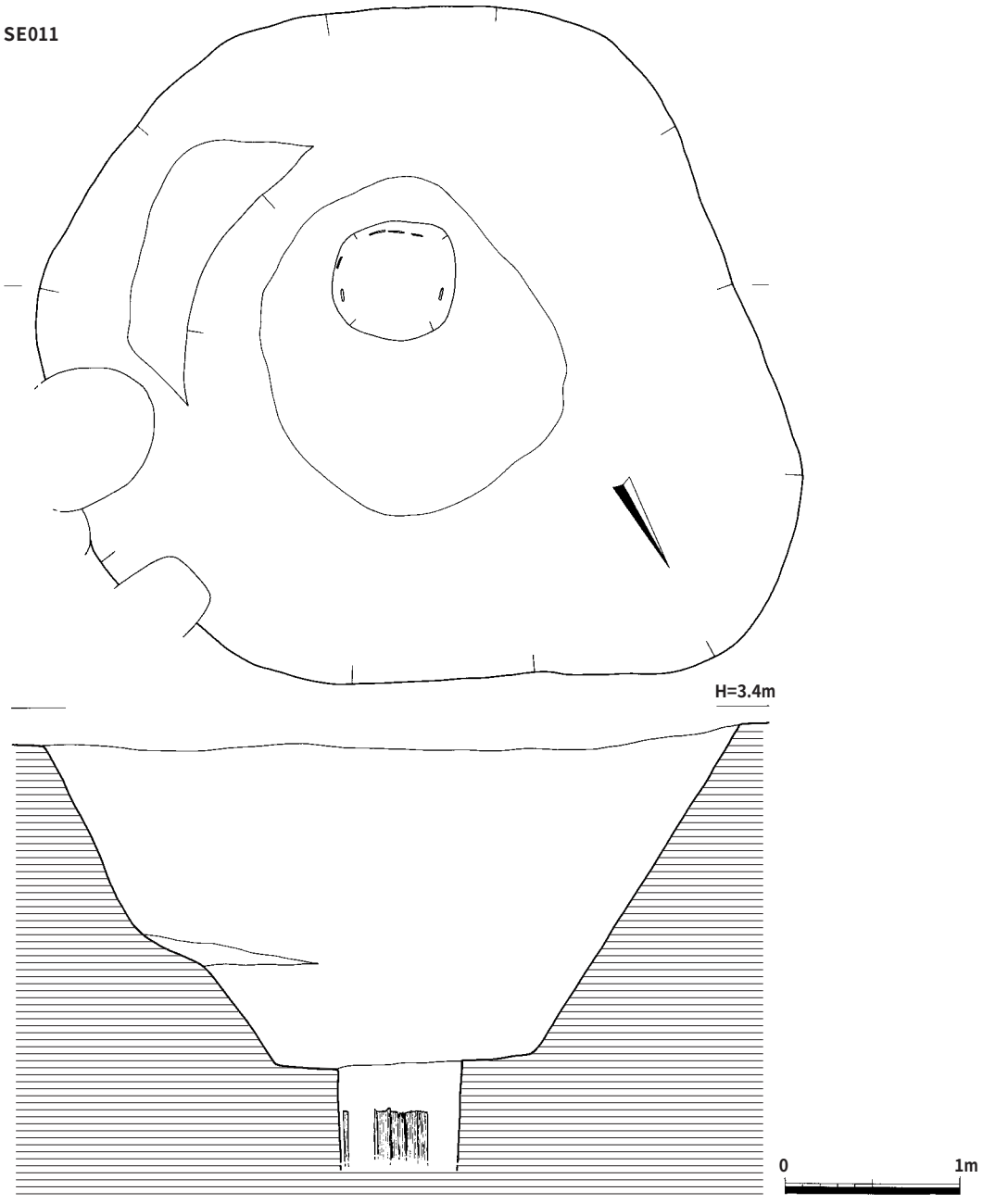
考えられる暗灰色砂質土が確認できた。また、上面から約1.8mに平坦面を設け、その西側寄りに井筒下部を据えるため、径0.6～0.7mの円形の掘り込みを有する。その下半部で湧水が認められ、底面は確認できていないが、径約60cmを測る木桶の板材20数枚が遺存していた。うち２枚は内部に倒れた状態で検出された。全体に板材の保存状態は不良であるが、幅８cm前後、厚さ約１cm、長さ15cm以上を測る。

出土遺物（第10図） 50･51は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿である。共に復元口径は8.7cmを測る。52は復元口径16.2cmを測る土師器坏である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認めら



第10図 SE010実測図(１/40)および出土遺物実測図(57は１/２、他は１/３)

れる。53は瓦器埦である。断面逆台形状の低い高台を添付し、内面は平滑に仕上げる。54～56は白磁である。54は碗Ⅴ類である。見込みには細い沈線が巡る。胎土は灰白色を呈し、やや粗い。釉色は緑味を帯び、内面および体部上半に施釉される。55･56は皿Ⅷ－１ｂ類で、見込みに片彫りによる花文を施す。体部中位で緩く屈曲し、その内面には沈線を有する。外底部の釉は施釉後に掻き取る。55の胎土は粗く、白濁色の釉が掛けられる。外底部には墨書が認められる。56の胎土は堅緻で、灰白色を呈する。器面にはピンホールが多い。57は石鍋の再利用と考えられる長方形の滑石製品で、一部に煤の付着が認められる。方柱状の摘みを中央に削り出し、紐通しの穿孔を有するが、その部分で折損している。他に回転ヘラ切り底の土師器や中国陶器、錆化の著しい銅銭片等が出土している。これらの出



第11図 SE011実測図(１/40)

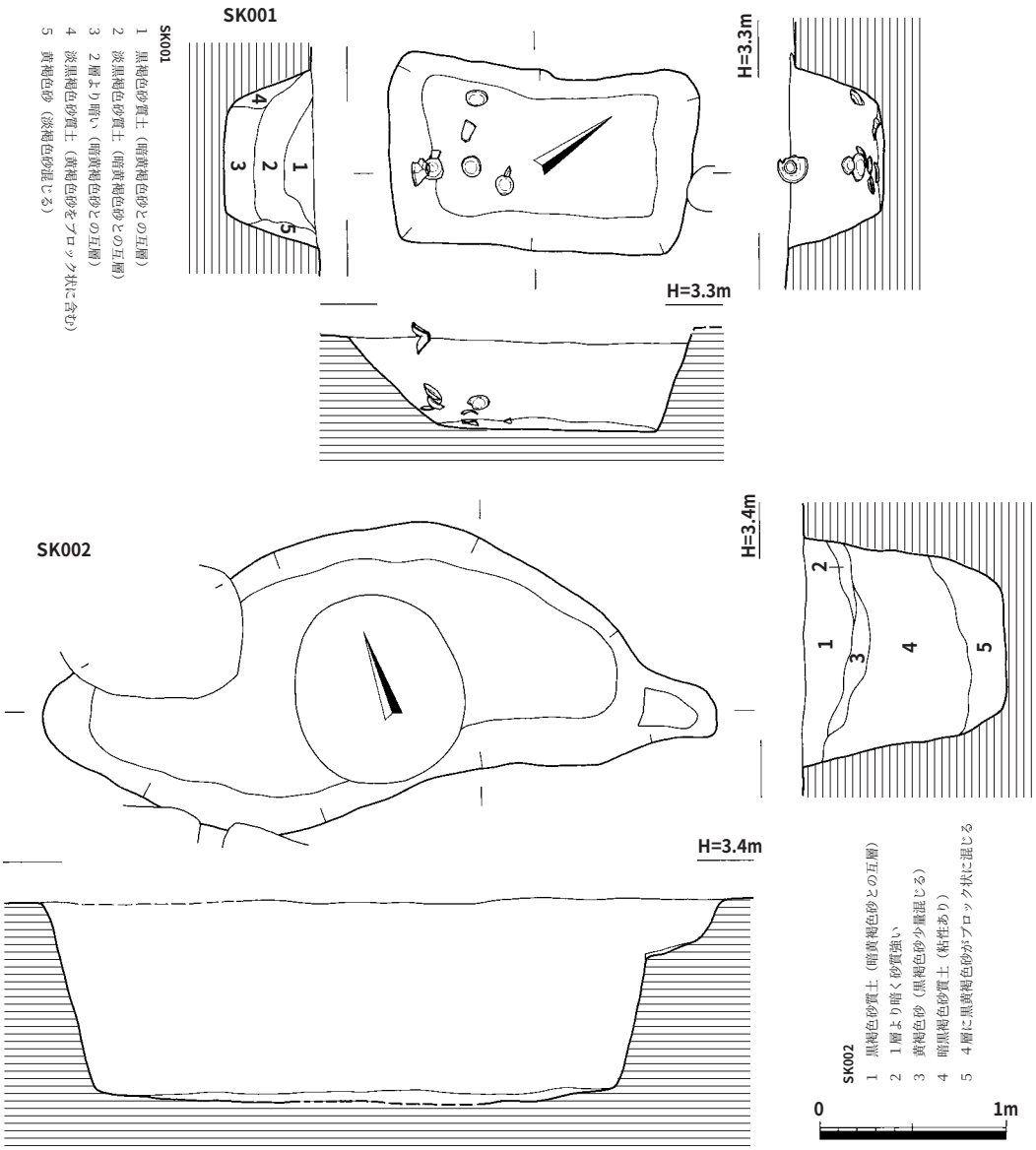
土遺物や他遺構との重複関係から12世紀中頃の遺構と考えられる。

SE011（第11図） Ｂ－２区に位置する井戸で、SE010、SK129を切る。平面プランは不整な円形を呈し、径4.0～4.5mを測る。覆土は暗灰褐色砂質土を主体に、暗黄褐色砂が混じる。また、井筒部分は灰褐色砂質土であった。南側壁面の中位には狭いテラスを有し、また上面からの深さ約1.8mの中央部に平坦面を設ける。更にその南寄りに井筒下部を据えるための径0.7mを測る円形の掘り込みが認められた。その内部下位では湧水が認められ、底面の確認に至らなかったが、幅８～10cm、長さ30cm以上を測る木桶材の一部が不良ながら遺存していた。

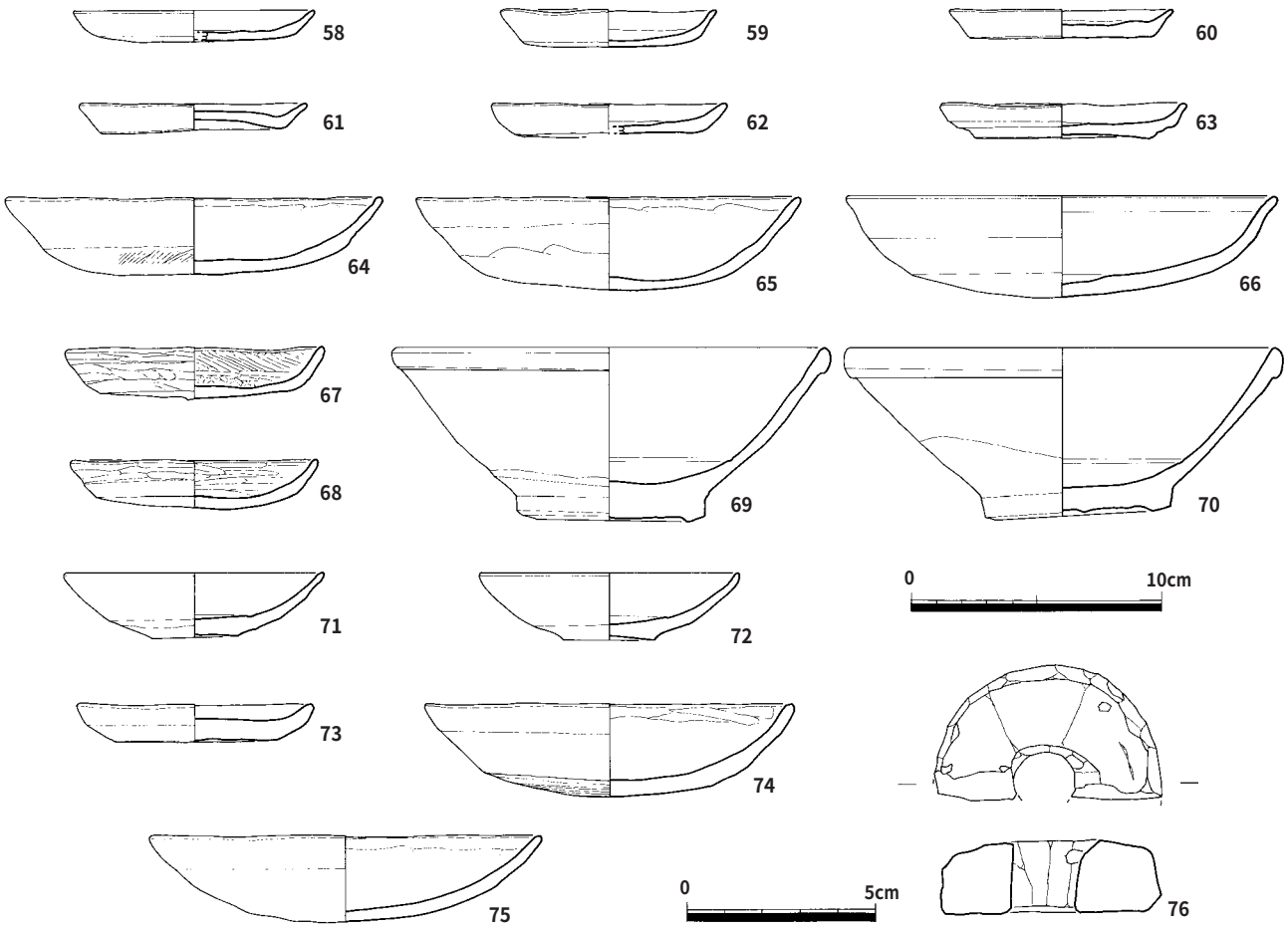
なお、出土遺物については、資料整理前の施設移動中に所在不明となっている。確認でき次第、別稿にて報告を行い、その責を果たしたい。なお、遺構の重複関係からは、12世紀後半以降の井戸と推定される。

２）土坑（SK）

SK001（第12図） Ａ－１区に位置する。SE008と僅かに重複し、遺構検出において本遺構が後出するという認識で掘り下げを進めたが、両遺構の出土遺物の検討結果、SK001はSE008に先行するものと考



第12図 SK001・002実測図（１/40）

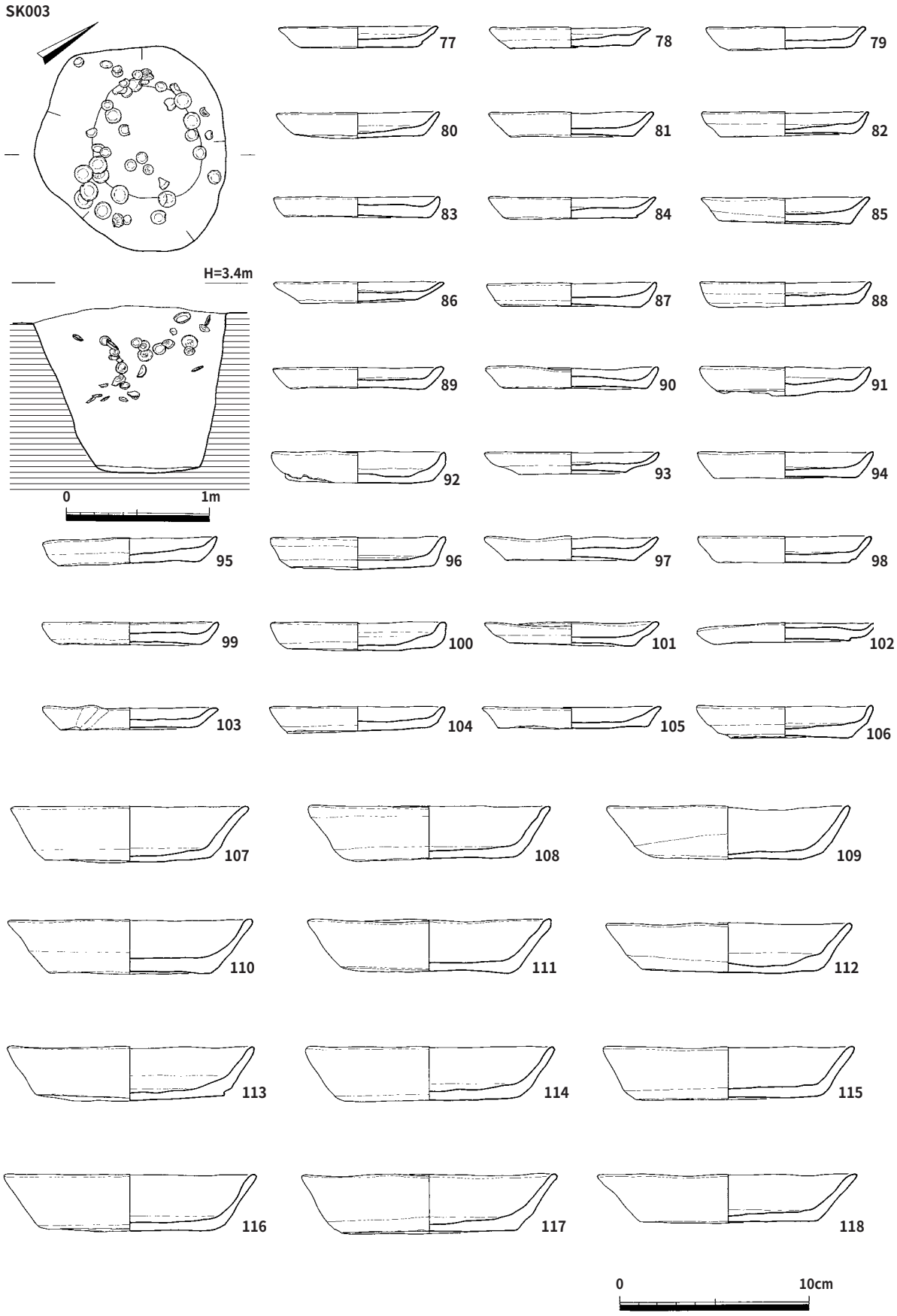


第13図 SK001・002出土遺物実測図(76は１/２、他は１/３)

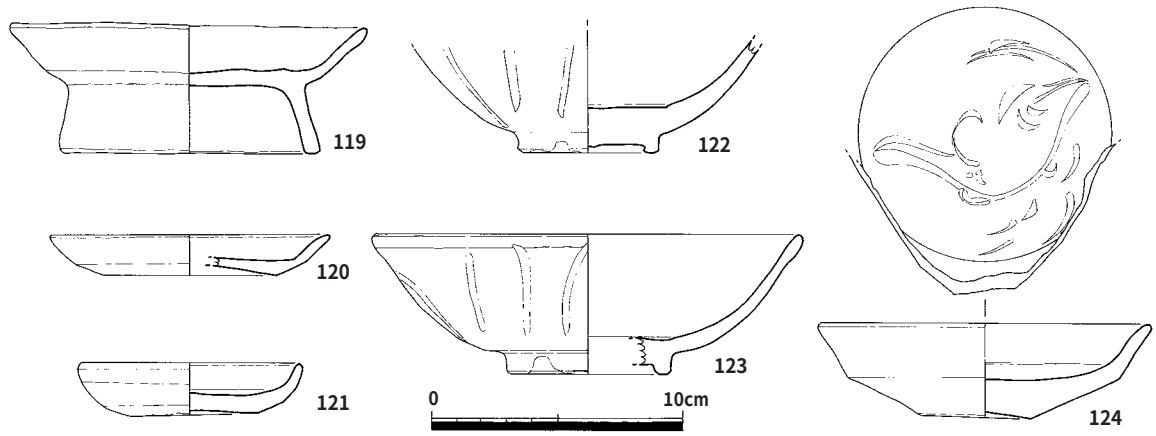
えられる。また、遺物の出土状態や土層観察から組み合わせ式の木棺墓と想定される。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ1.7m、幅1.0m、深さ0.5mを測り、断面形は逆台形をなす。頭位方向は遺物の出土状況から南西側と推定される。これらの遺物群は棺蓋の崩壊に伴い、棺内に転落した蓋上の供献遺物と考えられ、土師器坏(64)、瓦器皿(67・68)、白磁碗(69)、白磁皿(71・72)が完形に近い状態で出土した。出土主軸方位はＳ－33°－Wである。

出土遺物(第13図58～72) 58～63は板状圧痕を有する土師器小皿である。大半が南側より出土した。58のみ回転ヘラ切り底で、他は回転糸切りである。口径は8.4～9.6cmを測り、平均は9.0cmである。64～66は回転ヘラ切り底の土師器坏で、いずれも板状圧痕が認められる。64・65の内面は研磨により平滑に仕上げる。順に口径は14.8、15.1、16.8cmを測る。67・68は瓦器皿で、器面にヘラ研磨を施す。共に回転糸切り底で、板状圧痕を有するが、68にはナデを加える。69～72は白磁である。69・70は碗Ⅳ１－ａ類である。胎土は濁りのある灰白色を呈し、外面の施釉部分にはピンホールが多い。71・72は皿Ⅵ－１ｂ類で、見込みに段を有する。71の釉調はやや黄味を帯びるが、72は白濁色を呈する。他に同安窯系青磁や滑石製品等の細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

SK002(第12図) Ａ－１区で検出した不整な長楕円形プランの土坑で、中央部分に近世の瓦組井戸が掘り込まれる。また、SE008、SD004を切る。東側壁面に小規模なテラスを有し、長径3.6m、短径



第14図 SK003実測図(１/40)および出土遺物実測図(１)(１/３)



第15図 SK003出土遺物実測図（２）（１/３）

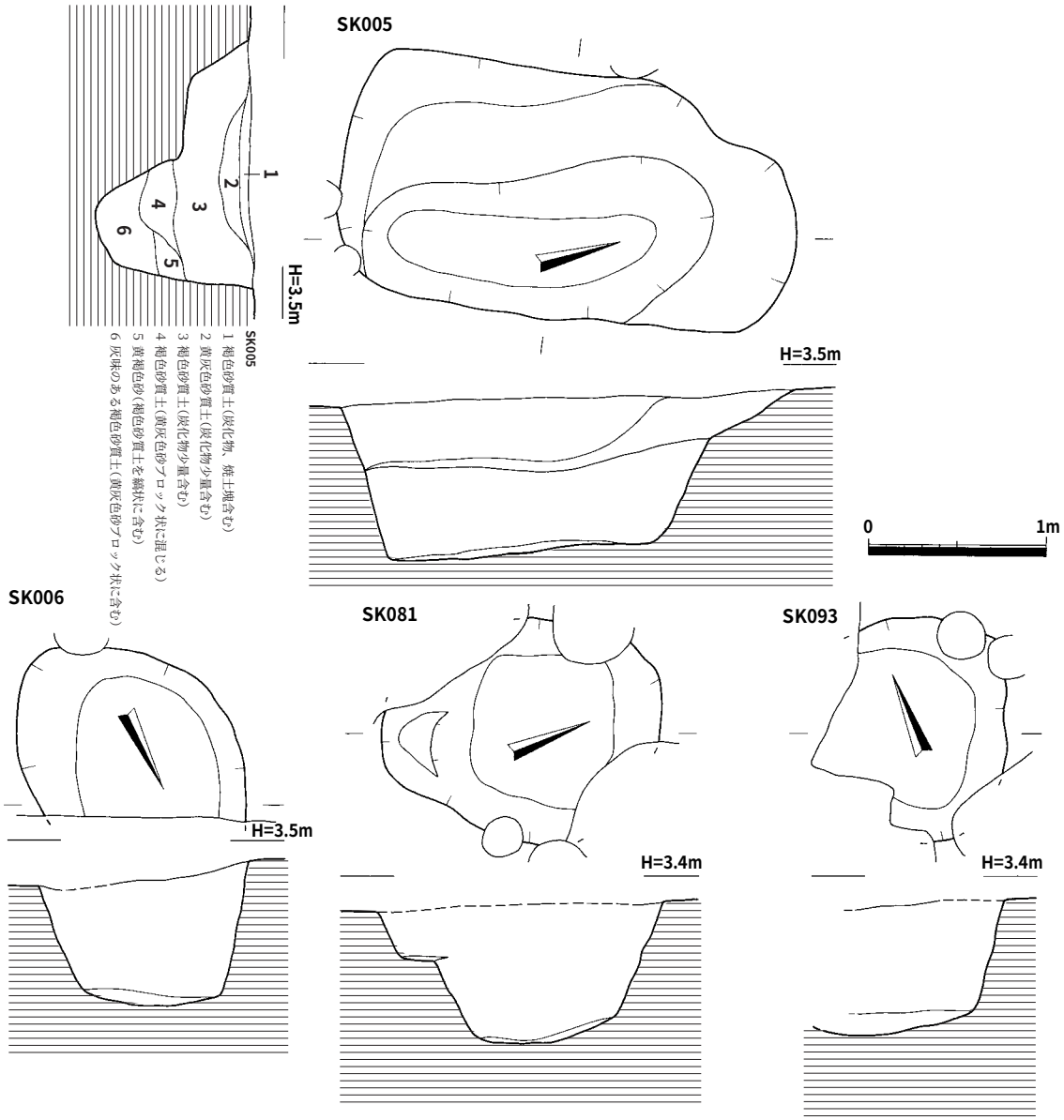
1.5m、深さ1.1mを測る。壁面の立ち上がりは急で、底面はほぼ平坦である。覆土は粘性のある暗黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（第13図73～76） 73は回転糸切り底の土師器小皿で、板状圧痕はない。口径9.2cmを測り、全体に器壁が厚い。74･75は土師器丸底坏で、外底部は回転ヘラ切りである。ミガキの工具は不明瞭であるが、内面を平滑に仕上げている。75のみに板状圧痕が認められる。順に復元口径は14･5、15.3cmを測る。76は円形を呈する滑石製石錘である。復元径6.0cm、孔径1.6cm、厚さ1.9cmを測る。他に白磁、青磁、格子目叩きの瓦等の細片が出土している。

SK003（第14図） Ａ－２区に位置する円形プランの土坑で、径1.4～1.5mを測る。断面は逆台形を呈し、深さ1.1mである。覆土は粘性のある黒褐色砂質土を主体とし、ブロックの混入はほとんど認められない。坑内の中位から上位にかけて完形に近い土師器小皿と坏が多数出土した。また、破片の白磁や青磁も少量含まれている。土師器は、西側では傾斜した状態で出土したが、東側では正立するものが多く認められた。

出土遺物（第14･15図） 77～119は土師器で、77～106は小皿である。いずれも回転糸切り底で、79･83･106を除き、板状圧痕を有する。体部内外面はヨコナデ調整を施し、内底部にはナデを加える。口径は8.2～9.2cmを測り、平均は8.8cmである。107～118は回転糸切り底の坏である。110･112には板状圧痕が認められない。調整は小皿と同様である。口径は12.2～13.4cmで、平均は12.6cmを測る。119は高台付きの坏ｃである。外底部には高台貼付時にヨコナデを加えているが、中央部に板状圧痕が僅かに残る。体部内外面はヨコナデ、内底部はナデ調整である。120･121は白磁である。120は皿Ⅸ－１類で、復元口径11.0cm、器高1.6cmを測る。口禿げ部分を除き、外底部まで施釉され、釉はやや青味を帯びた灰白色を呈する。121は皿Ⅷ－１′である。体部外面に鈍い稜線を有し、内湾気味に立ち上がる。体部内面と見込みの境界には沈線が巡り、屈曲する。全面に青味のある釉を施し、外底部は削り取る。122～124は龍泉窯系青磁である。122･123は碗Ⅱ－ａ類で、畳付きから外底部には施釉されない。122の見込みには段を有し、砂目が残る。釉はやや黄味を帯び、光沢がある。123は体部が大きく開き、器高が浅い。口縁部の釉垂れにより、蓮弁文の上端部が不鮮明である。灰色の粗い胎土に濁った緑灰色の釉が掛けられる。124は皿Ⅰ－１ｂ類で、体部中位で屈曲する。厚味のある器壁を有し、見込みに片彫りによる魚文を施す。外底部は露胎である。他に須恵質土器や中国陶器等の細片が出土している。これらの出土遺物から13世紀中頃の遺構に位置付けられる。

SK005（第20図） Ａ－２区で検出した隅丸長方形プランの土坑で、SE008･009を切る。長さ2.5m、

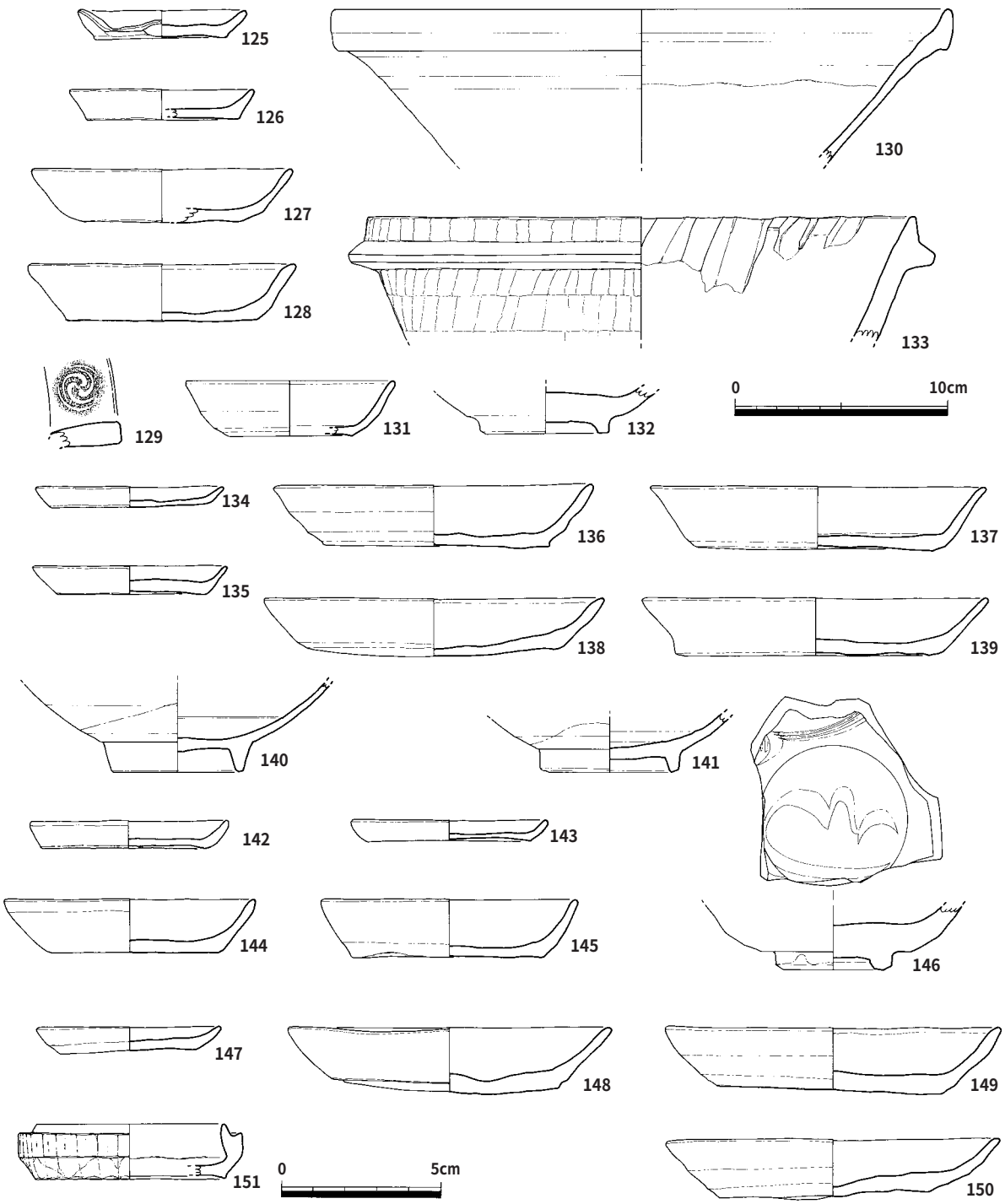


第16図 SK005・006・081・093実測図(１/40)

幅1.4m、深さ0.9mを測る。西側壁面の中位に平坦面を有し、東側が断面船底状に深くなる。覆土の上層には炭化物や焼土塊が認められた。

出土遺物(第17図125～133) 125・126は回転糸切り底の土師器小皿である。順に口径は7.7、8.5cmを測る。125は体部の焼き歪みが著しい。127・128は土師器坏で、外底部は板状圧痕を有する回転糸切りである。順に復元口径は11.8、12.3cmである。129は土師質土器鍋の口縁部片である。上面に巴文のスタンプを有する。130は復元口径28.8cmを測る須恵質土器鉢で、口縁部を玉縁状に肥厚させる。131は白磁皿Ⅸ－２類である。体部外面から底部にかけては施釉されない。132は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。畳付きから外底部は露胎である。緻密な灰色の胎土に暗緑色の釉を施す。133は滑石製石鍋で、口縁部下に断面台形の鍔を削り出す。外面にはノミによる削痕が残る。他に中国陶器や青白磁合子蓋等の細片が出土した。これらの出土遺物から13世紀末の遺構と考えられる。

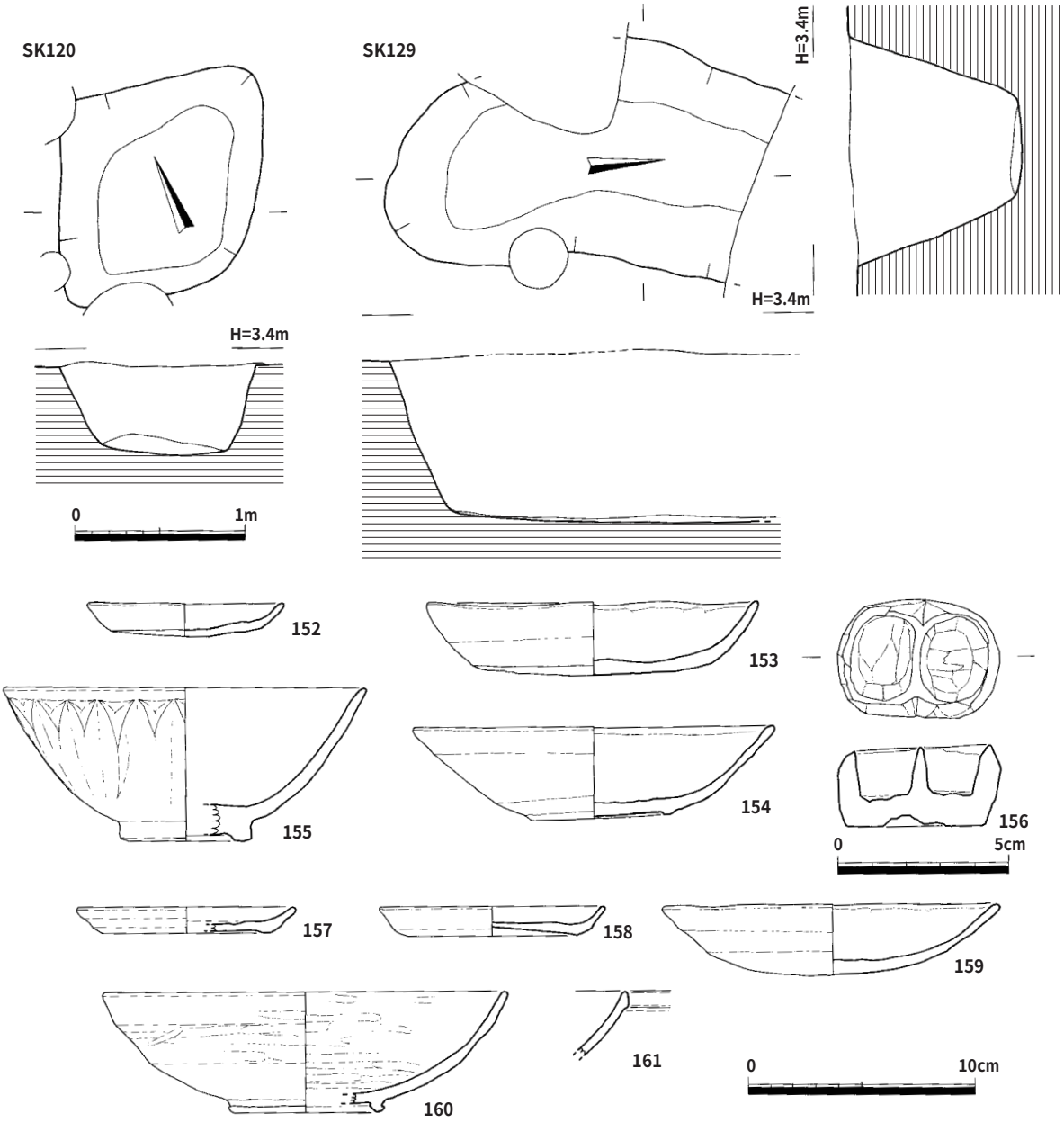
SK006(第16図) Ｂ－２区の調査区際に位置し、北東側は調査区外に延びる。幅1.2m、深さ0.8mを測り、断面は逆台形を呈する。覆土は粘性のある黒褐色砂質土で、炭化物を少量含む。東側上層で、



第17図 SK005・006・081・093出土遺物実測図（151は１／２、他は１／３）

完形に近い土師器小皿や坏が出土した。

出土遺物（第17図134～141） 134・135は回転糸切り底の土師器小皿である。順に口径は8.7、8.8cmを測る。134には板状圧痕が認められる。136～139は土師器坏で、いずれも板状圧痕を有する回転糸切り底である。口径は14.7～15.8cmである。140・141は白磁碗である。140は碗Ⅴ類で、内面下半に沈線が巡る。粗い白濁色の胎土に黄味がかった白色の釉が、外面下半以下を除き施される。内面には貫入が多



第18図 SK120・129実測図(１/40)および出土遺物実測図(156は１/２、他は１/３)

い。141は碗Ⅷ－１類で、見込みの釉を輪状に掻き取る。体部下半以下は露胎である。釉はやや青味を帯びる。他に須恵質土器や中国陶器、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類等の細片が出土している。13世紀前半の遺構と考えられる。

SK081(第16図) Ｂ－１区で検出した土坑で、周囲を他の遺構や撹乱に切られるものの、平面プランは不整な隅丸方形状を呈するものと考えられる。南側が突出し、壁面には小規模なテラスを有する。現況で長さ1.6m、幅1.3m、深さ0.8mを測る。

出土遺物(第17図142～146) 142・143は板状圧痕のない回転糸切り底の土師器小皿である。共に口径は9.0cmを測り、内底部にナデを加えない。144・145は土師器坏である。外底部は回転糸切りで、145には板状圧痕が認められる。口径は順に11.6、11.8cmを測る。146は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２ａ類である。見

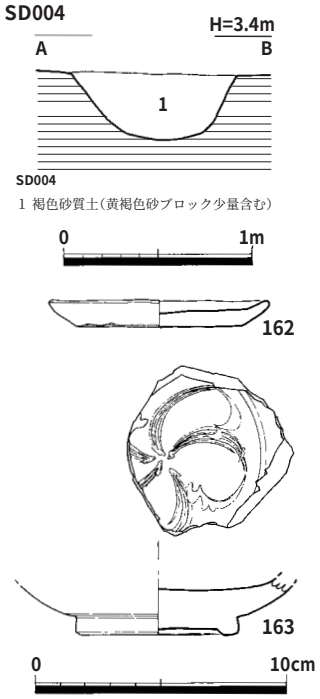
込みおよび体部内面に片彫りと櫛状工具による施文を有する。灰色を呈する胎土に半透明で光沢のある淡緑色の釉が施される。畳付きおよび外底部は露胎となる。他に白磁壺や碗の細片が少量出土している。

SK093（第16図） Ｂ－１区で確認した。東側を撹乱されるため、遺構の遺存状態は不良である。平面プランは隅丸方形もしくは円形を呈するものと推測され、深さは0.7mを測る。

出土遺物（第17図147～151） 147は口径8.4cmを測る土師器小皿で、外底部は板状圧痕のある回転糸切りである。148～150は回転糸切り底の土師器坏で、いずれも板状圧痕を有する。口径は15.0～15.4cmである。151は青白磁合子身である。体部外面には型押しによる菊弁文が施される。蓋受け部および体部外面の下端以下は露胎である。外面の施釉は厚味がある。他に須恵質土器、中国陶器、同安窯系青磁等の細片が出土している。

SK120（第18図） Ａ－２区に位置し、SK129を切る。不整な方形プランを呈し、一辺約1.2m、深さ0.5mを測る。

出土遺物（第18図152～156） 152は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底の土師器小皿で、口径8.4cmを測る。153・154は土師器坏である。外底部は共に回転糸切りで、板状圧痕が認められる。153の口径は14.4cmを測り、内面はミガキにより平滑な仕上げを行う。154は小さな底部に直線的に開く体部が付く坏ｂで、内底部にナデを加えない。155は龍泉窯系青磁碗Ⅱ－ｂ類である。内外面に貫入が多く認められる。156は滑石製の小形容器で、双胴をなす。削りの後、粗い研磨を施している。幅4.8cm、器高2.4cmを測る。他に瓦器や白磁、瓦等の細片が出土している。



第19図 SD004実測図（１/40）および出土遺物実測図（１/３）

SK129（第18図） Ａ－２区で検出した溝状の土坑で、SE011、SK120に切られる。幅1.3m、深さ1.0mを測り、断面は逆台形を呈する。現況での平面形態は僅かにカーブが認められた。

出土遺物（第18図157～161） 157・158は回転ヘラ切り底の土師器小皿で、板状圧痕を有する。順に復元口径は9.4、9.8cmを測る。159は口径14.5cmの土師器丸底坏である。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕はない。体部内面にはミガキを施すが、調整の単位は不明瞭である。160は復元口径17.4cmを測る土師器丸底坏ｃで、低い高台を貼付する。体部内外面にミガキを加えている。161は白磁碗Ⅱ類の口縁部片である。胎土はやや粗い白色を呈し、黄味のある白色の釉が施される。他に瓦器、中国陶器、白磁碗Ⅳ類等が出土した。12世紀前半の遺構と考えられる。

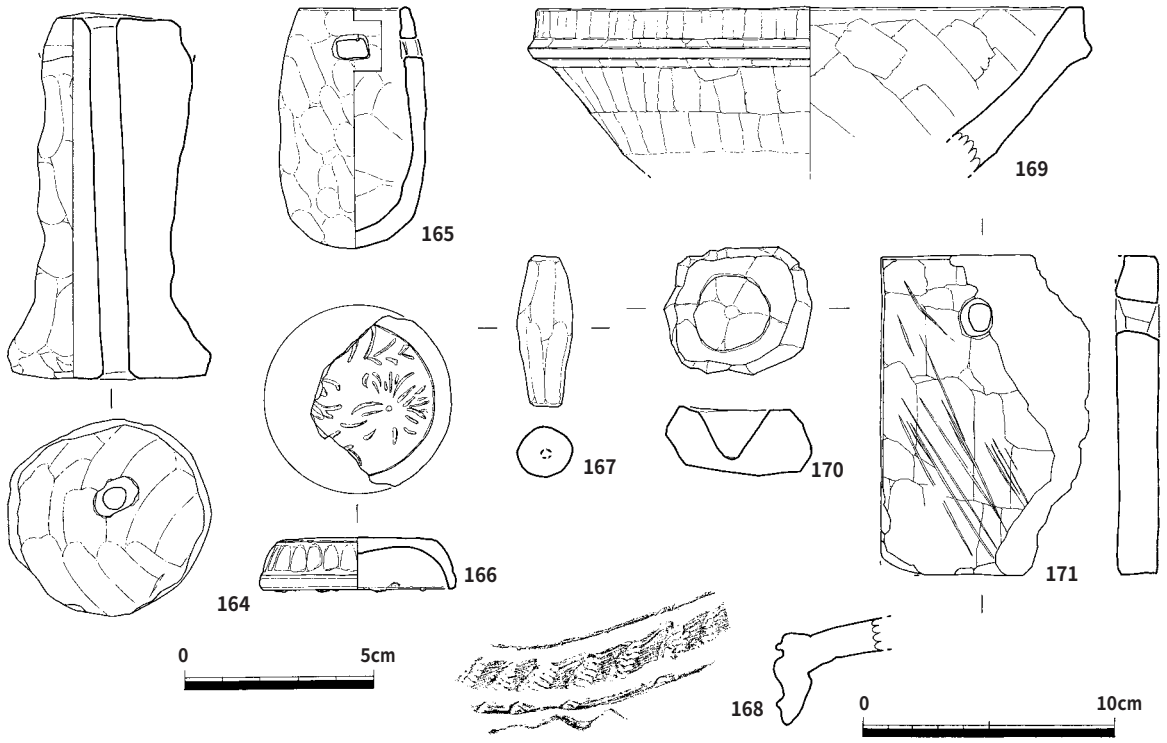
３）溝（SD）

SD004（第４・19図） 調査区南壁面沿いのＡ－１・２区で確認した溝で、西側は調査区外に延長している。SE007・008を切り、SK002に切られる。幅0.6～0.8m、深さ0.2～0.3mを測る。底面の標高は西側が高い。

出土遺物（第19図） 162は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿である。復元口径は8.4cmを測る。163は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。見込みに櫛目および片彫りによる花文を有する。畳付きの一部に施釉がおよぶが、外底部は露胎である。

４）その他の遺物（第20図）

ここでは、ピットおよび遺構検出時出土遺物の一部をとりまとめて報告する。164は土師質の器台で、



第20図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図（166・167・170は１／２、他は１／３）

脚裾部と受部を欠失する。成形時に棒を巻き付けた孔芯が中央に残り、器面は指オサエで調整される。胎土に金雲母片を多く含む。165は飯蛸壺で、口縁下にヘラ状工具による方形の穿孔が焼成前になされる。166は青白磁合子蓋である。体部外面に菊弁文、天井部には型押しによる草花文を施す。167は紡錘形を呈する管状土錘で、長さ3.9cm、径1.5cm、重量7.0ｇを測る。指ナデによる調整を行う。168は押圧文の軒平瓦である。瓦当には櫛状工具による波状文、顎部には押圧文を施す。平瓦部はナデ調整を行う。169～171は滑石製品である。169は石鍋で、口縁下に断面台形の鍔を削り出す。170は小形の容器で中央部を円錐形に削る。171は板状に加工を施した温石で、長さ12.6cm、幅8.2cmを測り、上部に径1.3cmの穿孔を有する。165はＡ－１区のSP068、167は同区SP063、168はＢ－１区SP078、他は遺構検出時の出土遺物である。

３．結語

本調査区における遺構の初現は12世紀前半で、SK129が挙げられる。続く12世紀中頃にはSE010やSK001が認められる。先述したとおり後者は埋葬遺構と考えられる。12世紀後半段階ではSE009、13世紀には前半から中頃にかけて先の井戸と重複してSE007・008が設けられている。また、同時期にはSK003・006も含まれ、遺構の数量としては最も多い時期といえる。SK005は13世紀末頃に位置付けられ、本調査区内では最も後出する遺構となる。

この周辺の砂丘尾根上の調査例は少ないが、15次調査では11世紀後半に遡る遺構が確認されている。周辺の調査例を含めると、11世紀後半から12世紀前半において砂丘尾根線を含む東側緩斜面が中世期の集落形成の端緒として積極利用がなされ、該期以降も継続した集落経営がなされていることが指摘できよう。

図　　版

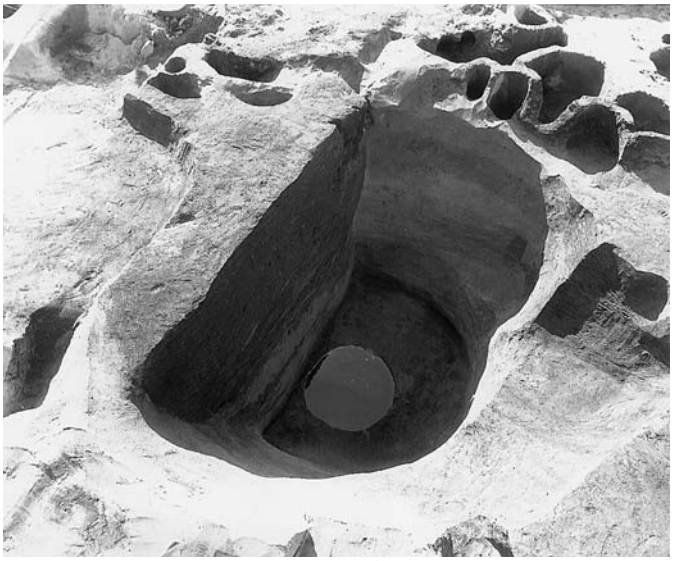
作業風景

12次調査区全景（南から）

図版２

（１）SE007（西から）

（２）SE008（北西から）



（３）SE009（東から）

（４）SE010（北西から）

（５）SE010井筒（南から）

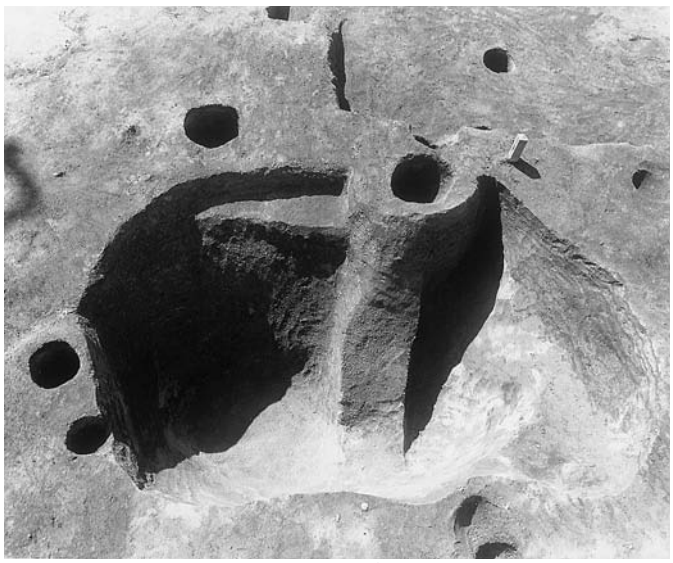
（６）SE011（北から）

（１）SK001（西から）

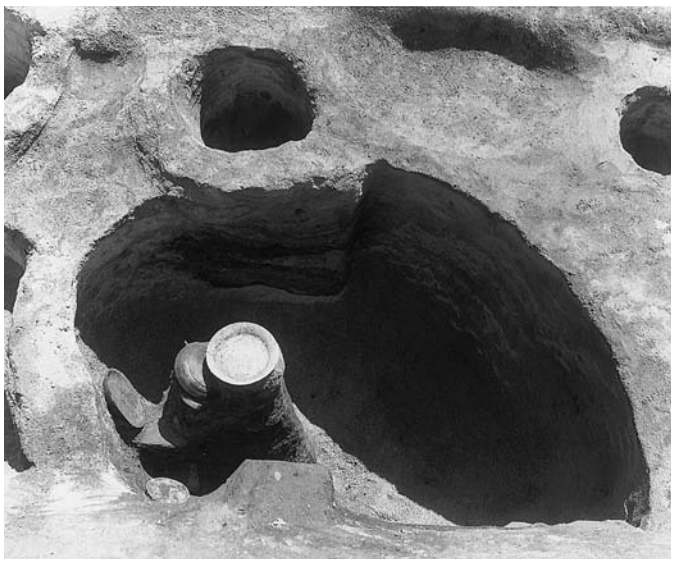
（２）SK001土層（南から）

（３）SK002土層（東から）

（４）SK003（北から）

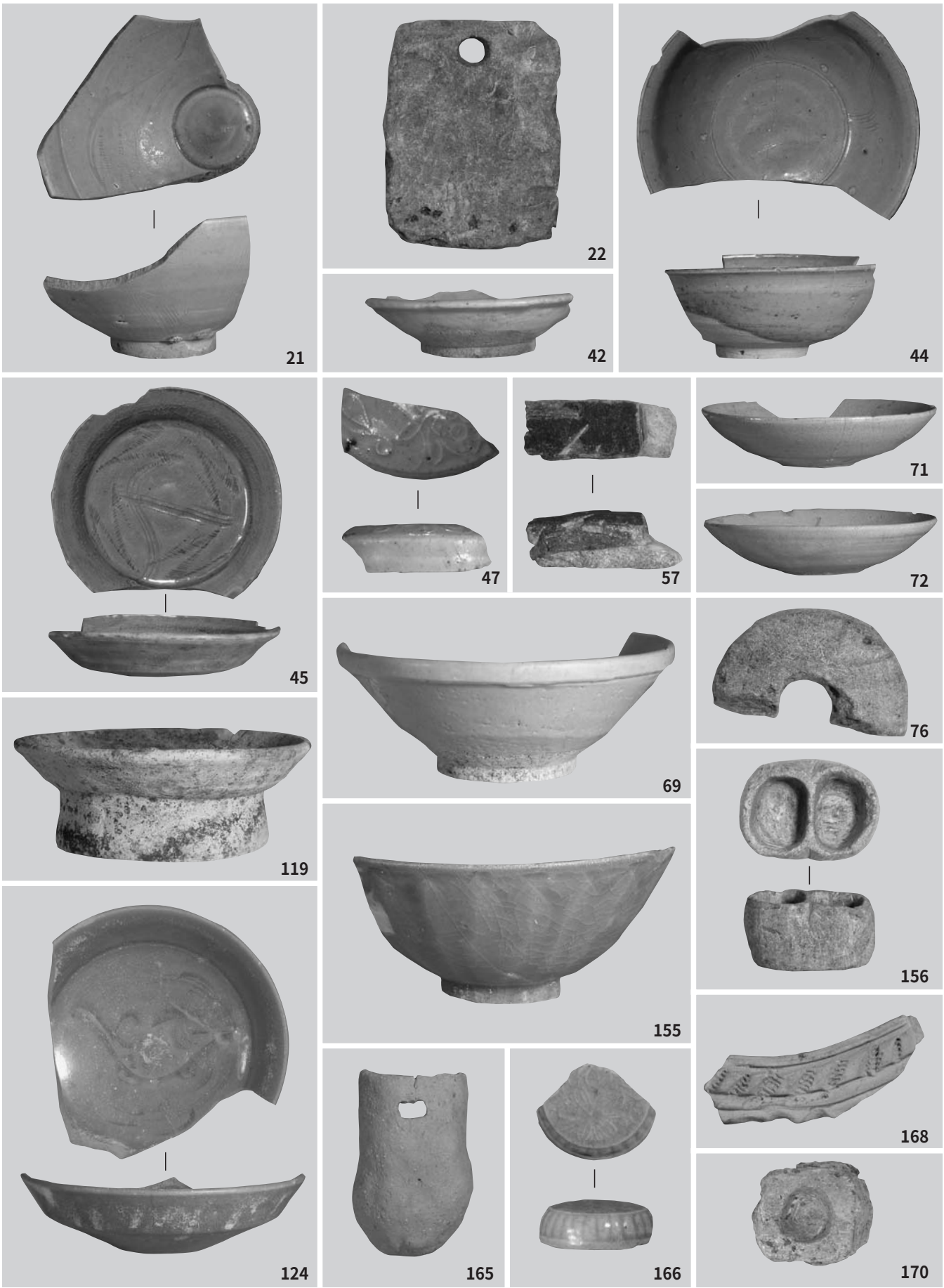


（５）SK005（東から）



（６）SK006（北から）

図版４



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はこざき29
書　名	箱崎29
副書名	箱崎遺跡第12次調査報告
巻　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第950集
編著者名	榎本義嗣
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	2007年3月30日
郵便番号	810-8621
住　所	福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
電話番号	092-711-4667

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東緯 	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
箱崎遺跡 第12次	福岡県福岡市 東区箱崎1丁目2606-3-1	40131	2639	33° 36′ 53″	130° 25′ 28″	19970819 ～ 19970924	155	個人専用 住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡 第12次	集落	中世	井戸　5 土坑　多数 溝　1 ピット　多数	土師器・土師質土器・瓦器 須恵質土器・中国陶器 白磁・龍泉窯系青磁・同安窯系青磁 青白磁 土製品・瓦・石製品	筥崎宮の門前町として発展した中世都市遺跡で、今回の調査ではその一端を確認した。

箱崎（はこざき）　29

―箱崎遺跡第12次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第950集

2007（平成19）年３月30日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号
（092）711－4667

印刷　(株)大里印刷センター
福岡市東区二又瀬新町12-29
（092）611－3118